

2020年9月1日

みずほディーラーズアイ (2020年9月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 103.50 ~ 107.50

市場営業部 為替営業第二チーム 松本 奈保輝

■ 先月の為替相場

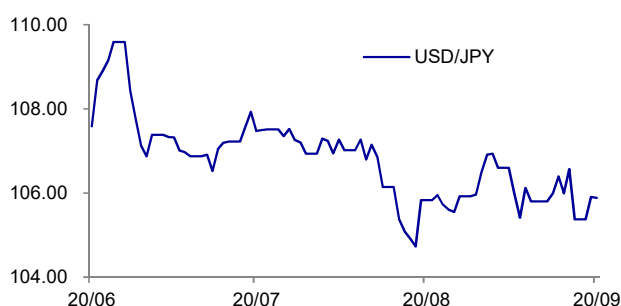
8月のドル/円相場は一時107円台に乗るが、定着ならず、月末にかけて105円台に振り落とされる展開であった。月初3日は105円台後半でオープン。日系企業による大口買収報道が意識される中、海外時間には過高値である106.47円まで上昇した。6日には米国での追加経済政策を巡る議会協議の先行き不透明感強まり、一時週安値の105.31円をつけた。7日は米7月雇用統計が総じて強い結果となったことや米政府が香港政府のトップらに制裁を科すことが伝わると、リスクオフのドル買いが強まり106円台をつけ、105.92円を越えた。週初10日はトランプ米政権による香港政府関係者への制裁に対して、中国側が複数の米議員に制裁を科したとの報道に米中関係悪化の懸念が高まり、リスクオフのドル買いから106円台前半まで上昇するも、米金利低下を背景に一時週安値となる105.72円まで下落した。12日には、米7月CPIの結果を受け107円台に乗せると、13日に一時8月の高値となる107.05円をつけた。14日にも107円台をつける場面もあったが、米7月小売売上高の結果が市場予想に届かなかったことで106円台半ばまで反落。週初17日は米追加経済対策で与野党協議の難航、さらに米8月NY連銀製造業景気指数の大幅な悪化を受けて、105円台後半まで下落。19日の朝方には8月の安値となる105.10円を付けたが、7月の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事要旨で追加緩和期待が後退すると、米金利は反転上昇し、ドル円は106円台前半まで戻した。週初24日は東京時間オープン後仲値にかけてドル売り優勢となり、105.69円まで下落。その後は新規材料に乏しい中、方向感に乏しい推移。25日は米7月新築住宅販売件数が予想を大きく上回り、一旦ドルが買い戻され短期的なレジスタンスとして意識されていた106.50を抜け上昇。27日はジャクソンホールでのパウエル議長の講演でFRBの長期目標改定に関する声明が発表され、「インフレは期間平均で2%を目指す」と述べ、ゼロ金利政策が長期化するとの見方からドル売りで反応し、105.60円をつけたが、FRBがインフレの一時的なオーバーシュートを容認することは既に織り込まれていたためか、米10年債利回りが上昇に転じると、月末を控えたドルの買い戻しや米株の堅調推移を眺め、円売りが強まる中、106円台後半まで上昇すると、28日週高値である106.94円まで上昇した。しかし安倍首相辞任の報道を受けた日経株の急落を嫌気してドル円も週安値105.20円まで下落した。週明け31日はショートカバーで105.80円まで上昇した後、買い一巡すると小幅に反落して105円半ばを中心とする値動きとなった。

■ 今月の見通し

9月のドル/円はドル下落する展開を警戒したい。先月のジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演にてインフレ目標の変更によりFRBが従来予想されていた以上に長期にわたってゼロ金利と量的金融緩和政策を継続することを示唆したことで金利面からドル上値を押さえることとなりそう。また先週28日には安倍首相の辞意が伝わった。想定外の辞任を受けて日経平均株価は急落、ドル/円も円高が進んだが、今月は安倍首相の後任人事、総裁選の行方に注目が集まる。特に海外勢からみた日本株買いの理由としては大規模な金融緩和策と安倍政権の安定性によるところも大きかった。日銀は首相の辞任を受け「政策に変更なし」という表明を行い、黒田総裁に任期も23年4月までであるため大規模な金融緩和は維持される可能性は高いものの、安倍首相が任期満了を待たずして辞任することとなりアベノミクス(日本株買い・円売り)の巻き戻しであるドル売り円買いが仕掛けやすい地合いといえよう。また日本株に関しては元々、現状の株価は思惑買いに近い状況で、株価が下がれば日銀が株価連動型上場投資信託(ETF)を買い、下値が支えられるとの意識もあり堅調推移していたが、新型コロナウイルスで経済が冷え込む中、实体经济との乖離を指摘する声もあった。株安から円高につながる動きは引き続き警戒する必要がある。日本株と同様に米国株の調整の動きにも留意が必要だ。いくら「カネあまり」とはいえど米中対立の激化や米大統領選の不透明感がある中、それなりの幅で調整され、ひいてはドル売りの動きになる可能性を見とくべきだろう。一方、ドル上昇する場合はその逆で、今後FRBが2%超の物価上昇を容認する可能性がある中、インフレ期待の高まりによって米長期金利が上昇、米国株の堅調さが継続し、米経済景気の早期回復への期待感が高まったという構図となった場合であろう。いずれにしても日本と米国の政治・経済状況、金融政策など差別化できるテーマを欠いている印象がある。ドル下落する展開が優勢とは考えるものの、先月13日につけた107.05円を上値の目途、先月19日につけた105.10円を下値の目途として膠着感が強い取引が続くのではないかと予想している。

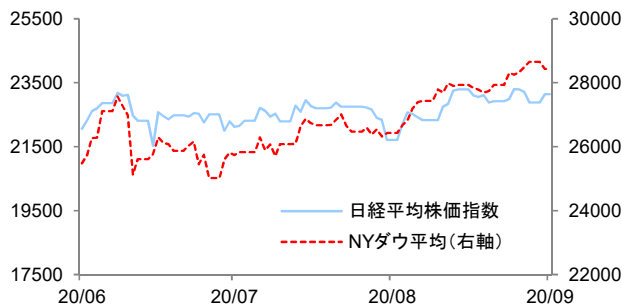
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	ISM製造業景況指数	7月	53.6	54.2	52.6
8/5	ISM非製造業指数	7月	55.0	58.1	57.1
8/7	非農業部門雇用者数変化	7月	1480k	1763k	4800k
8/7	失業率	7月	10.6%	10.2%	11.1%
8/7	平均時給(前年比)	7月	4.2%	4.8%	5.0%
8/17	ニューヨーク連銀製造業景気指数	8月	15.0	3.7	17.2
8/14	鉱工業生産(前月比)	7月	3.0%	3.0%	5.4%
8/14	小売売上高速報(前月比)	7月	2.10%	1.20%	7.50%
8/27	GDP(年率/前期比)	2Q S	-32.50%	-31.70%	-32.90%
8/27	新規失業保険申請件数		1000k	1006k	1106k

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	10名	108.00 ～ 104.25	ベア	11名	107.00 ～ 104.00	※ レンジは中心値
田中	ベア	107.00 ～ 104.00	FEDはフォワードガイダンスに注目も緩和姿勢は不変。米大統領選やコロナ情勢も変わらずドル売り材料継続も新味に欠くのも事実。本邦政局は政策継続を優先に混乱は回避され、ドル円はもみ合いを想定。			
竹内	ベア	108.00 ～ 104.00	米金融政策を占うイベントを通過し、焦点は米大統領選挙の趨勢に。ドル指数も引き続き安値圏で推移しており、ドル安の受け皿として円が選好され易い。ポスト安倍を巡る動きは現状路線継続がメインシナリオで相場に及ぼす影響は限定的。			
筒井	ブル	109.00 ～ 104.00	8月にFEDは雇用改善に注力する政策変更を発表し、9月FOMCでは株式市場サポートとなる政策を打ち出すと予想。結果株高及び中期以降の米金利上昇となりドル円は上昇する。			
加藤	ブル	110.00 ～ 105.00	コロナ禍においては安倍後継の首相ができるとすればアベノミクスを踏襲するか、万が一安倍さんとの差別化を図るとしても、期間限定消費税率低減のように円安要因になるような政策しか取れないと考える。			
山岸	ベア	107.00 ～ 104.00	FRBは「物価上昇率が2%を一時的に超えることを容認する」新たな指針を8/27に発表。米金融緩和の長期化で米実質金利低下とともにドル安地合い継続か。日米の政治・政策への不透明感の高まりもリスク回避の円買い材料として警戒。			
牛島	ブル	107.00 ～ 104.00	期待先行の米株高、ドル安のトレンドはそろそろ転換を迎えたとみる。膨らんだドル売りポジションの巻き戻しは徐々に入っている。7月末の円高局面では105円割れから当局の動きも確認されており、下値は限定的。			
田坂	ブル	107.00 ～ 104.00	ジャクソンホールで公表されたFedの新フレームワークを背景に、株高・ドル安トレンドが継続、ドル円は緩やかに下落するだろう。但し、大統領選挙を巡る思惑に株が急落するでのドル円急落には注意が必要。			
尾身	ブル	108.00 ～ 104.00	ドル安の反動から持ち直すと予想。背景は、低金利政策の長期化、追加の財政政策への期待、堅調な米株相場など。リスクは米金利低下による一時的なドル売りの強まり。月初は105円割れを試す場面も見られるか。			
上野	ベア	107.00 ～ 103.00	市場もwithコロナ期に入ったのか、同ヘッドラインへの感応度は低下。注目は(特に米国の)経済動向と、金融・財政政策に移りゆくだろう。米大統領でバイデン氏優勢を織り込みが進むと、株主導でドル円が下値を探る展開も。			
山口	ベア	107.00 ～ 104.00	パウエルFRB議長は超低金利政策の継続で2%超のインフレ率を容認するとの発言をしており、ドル安は継続か。米中問題、コロナ拡大、大統領選などリスク要因が多い中、ドルは買いにくく、ドル円は上値重く推移すると予想。			
甲斐	ブル	108.00 ～ 104.50	米経済指標が市場予想を上回るとともに、フォワードガイダンスが織り込まれることで、ドルの強さを再確認すると予想。緩和相場での米株高・米長期金利高となり、円安に進むと予想。			
小野崎	ブル	107.00 ～ 104.00	首相交代の影響は懸念されるも過度な政策変更は行わないという想定から相場への影響は限定的か。105円付近での下値の堅さは感じるもののFedの低金利政策維持などを踏まえると上値追いましめがたくレンジ相場か。			
玉井	ベア	107.00 ～ 104.00	先日FRBがインフレ率の平均的な目標の導入を決め、米国では緩和策が長期間継続されることが確認された。堅調な米株がドル円の支えとなる場面はありそうだが、低金利を背景にドルの買い戻しは限定的となろう。			
原田	ブル	107.50 ～ 105.00	Fedがインフレの一時的なオーバーシュート容認を示唆したことで今後も政策が継続されることが確認された。米金利の上昇と株高を背景に、ドル円は上昇しやすい。一方、ポスト安倍が決まるまでは、ボラティリティの高い状況となろう。			
大庭	ブル	108.00 ～ 104.50	安倍首相の辞任表明により政局の先行き不透明感から円高推移。しかし、新総裁の任期が来年9月で満了し、再度総選挙が実施されることから、一旦次期政権までの短期的な緊ぎが想定される。政策に大きな変更が無いことから買い戻しを予想。			
上遠野	ベア	107.50 ～ 103.50	ジャクソンホール会合でのパウエルFRB議長の発言を基に、当面の金融緩和と政策が再確認されたことでドル円の上値は抑えられよう。但し、米大統領選に向け動きが本格化することから、同ヘッドラインを受け上下値幅のある展開を想定。			
小林	ブル	108.00 ～ 105.00	安倍首相の辞任により日経平均が大幅に下落。円高が進行するも、105円近辺では底堅さが確認された。次期政権においても大きな政策変更は考えづらいことや、FEDの金融緩和と政策による米株高を受けてドル円は上昇を予想。			
松本	ベア	107.50 ～ 103.50	FRBは従来予想されていた以上にゼロ金利政策と量的金融緩和を継続することを示唆しており、金利面でドル上値が重い。また日米ともに政治への不透明感が出てきておりドル円上昇は見込みにくい。			
逸見	ベア	107.00 ～ 104.00	米の緩和的な経済政策が長期化するとの見込みからドル金利は上値重く、ドル安傾向を想定する一方で、安倍内閣退陣や米大統領選挙の本格化に伴う先行き不透明感から、当該トピックスに振られる展開か。			
大谷	ベア	107.00 ～ 104.00	ジャクソンホールにてパウエルFRB議長は2%超のインフレ率を許容する方針を示しており、米国の緩和的な政策は維持されることから引き続き上値の重い推移を予想。一方でドルと円の力関係は拮抗しており、下値は限定的か。			
大熊	ベア	107.00 ～ 104.00	米中関係の悪化や警官による黒人襲撃の問題等、米政局不安に加えて、安倍首相の辞任により本邦の政治先行き不透明感も高まっている。日米両国の政局の不安定化が懸念され、リスクオフの円買い圧力が高まりやすいと予想。			

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1700 ~ 1.2200
EUR/JPY 122.00 ~ 130.00

市場営業部 為替営業第一チーム 田坂 満里衣

■ 先月の為替相場

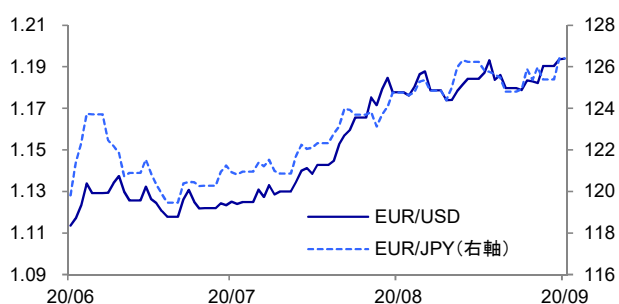
8月のユーロ相場は、欧州復興基金創設合意を受け急騰した7月に続き、上値模索の展開。1.20台示現には至らなかったが、2018年5月以来となる1.1966まで高値更新し、総じて底堅く推移した1ヶ月となった。月初1.17台後半でスタートしたユーロドルは、米金利低下を背景とするドル売りにサポートされ堅調推移。6日発表された予想を上回る独6月製造業受注を受け、7月高値1.1909を上抜け1.1916まで上昇。利益確定の売り圧され一旦は1.18台前半まで反落したが、売り一巡後はすぐに1.19付近まで回復。しかし、7日、トランプ米大統領がSNSアプリを提供している中国企業との取引を禁じる大統領令に署名したことを受け、リスクオフのドル買いが強まると、ポジション調整も相俟って、1.17台半ばまで下げ幅を拡大する流れとなった。11日、良好な独8月ZEW景況感指数を好感し1.18台半ばまで回復する場面も見られたが、米金利上昇を背景とするドル買いを受け、12日には月安値となる1.1711まで下落。しかし、ムニューシン米財務長官の発言を受け、減税による米景気対策への期待感が後退するなか、ドル売りが強まり、1.18台前半まで回復。その後は18日にかけて、弱い米経済指標や米中対立激化懸念を背景に、ドル全面安の展開となったことから、ユーロドルは力強く上昇し、2018年5月14日以来の水準となる月高値1.1966を記録。1.20台突破には至らず、19日FOMC議事要旨でイールドカーブ・コントロール導入について複数名から消極的な姿勢が示されたことが明らかになり、米追加緩和への思惑が後退したことからドル買いが強まり、1.18台前半まで下落。21日、予想比下振れとなったフランスやユーロ圏の8月PMIを受けユーロ売りが強まる中、バルニエEU首席交渉官の発言を受けブリュッセル交渉の先行き不透明感が高まったことも下押し材料となり、1.17台半ばまで一段安となった。1.18台前半のレンジで方向感なく推移した後、28日、ジャクソンホールで開催された講演で、パウエルFRB議長が金融政策の枠組みの見直しを表明、「インフレ率は期間平均で2%を目指す」としたこと、ゼロ金利政策が長期化すると見方が強まり、ドル全面安の展開に。これを受け、ユーロドルも1.1920まで急騰し、その後も1.19台前半で底堅く推移した。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場も、欧米金利差・米対比立ち上がり期待できそうな欧州ファンダメンタルズを背景に堅調推移が継続、2018年5月以来となる1.20を突破するだろう。但し、ユーロ買いポジションが過去最大水準まで積みあがっている状況下、ポジション調整による急落には注意が必要だ。欧州復興基金創設合意がユーロのトレンドを明確に転換するきっかけになったわけだが、足元のマーケット環境を見直すとユーロが選好される材料は溢れている。まず、ユーロドル上昇主因のひとつである欧米金利差縮小。先般ワイオミング州ジャクソンホールで開催された経済シンポジウムの講演でパウエルFRB議長が公表した新たな金融政策のフレームワークにより、一段と米金利の動きが抑制されやすい状況が続くことが予想される。新フレームワークは、①物価よりも雇用を重視し、最大雇用の確保に努めること ②Average Inflation Targetの導入の2本柱となっているが、コロナによる経済ショックで雇用や物価の下方リスクが高まっている状況下、米短中期金利の上昇は抑えられ、これにより米長期金利の上昇も抑制されるだろう。斯かる状況下、ユーロドル下落をもたらす欧米金利差拡大シナリオは想定しがたく、ユーロ上昇トレンドとまではいかなくとも、堅調に推移するだろう。また、もうひとつのユーロドル上昇主因である欧州ファンダメンタルズについていえば、8月発表の経済指標では「V字回復」というよりは「停滞状況」が確認されることになってしまったが、米国との比較感からいえば、「欧州経済に劣後する米国経済」という構図には変わりなく、消去法的にユーロが選好されやすい地合は継続しよう。但し、留意すべき点は積みあがっているユーロ買いポジションの行方である。8月28日公表のシカゴ・マーカント取引所が8月28日に公表したIMM通貨先物によると、ユーロ買い持ち高は更に増加し、前週に続き過去最大を更新している。これはユーロ上昇余地を圧迫する要因に充分なり得る上、節目となる1.20台を2018年5月以来突破するタイミングでは達成感から大規模なポジション調整が起きる可能性もあり得るため、注意が必要である。とはいえ、上述の通り、ユーロドル上昇をもたらす2つの要因を勘案すると、ポジション調整による売り一巡後は再び力強く上昇する展開が予想される。

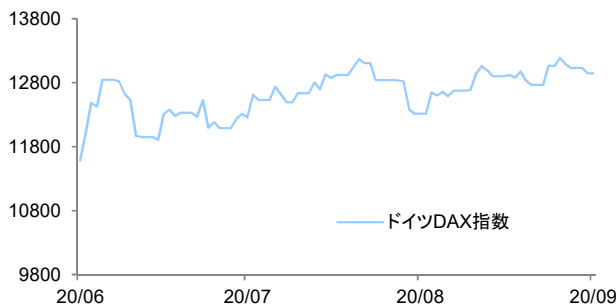
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	欧州小売売上高(前月比)	6月	6.1%	5.7%	17.8%
8/11	独ZEW景気期待指数	8月	55.8	71.5	59.3
8/12	欧州鉱工業生産(前月比)	6月	10.0%	9.1%	12.4%
8/21	欧州マークイット製造業PMI	8月	52.7	51.7	51.8
8/21	欧州マークイットサービス業PMI	8月	54.5	50.1	54.7
8/21	欧州マークイットコンポジットPMI	8月	55.0	51.6	54.9
8/25	独IFO企業景況感指数	8月	92.1	92.6	90.5

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	14名	1.2075 ～ 1.1700	ベア	7名	1.2000 ～ 1.1600	※ レンジは中心値				
田中	ブル	1.2100 ～ 1.1700	米大統領選や米中関係不透明感、米実質金利の低さとドル売り材料は不変。欧州でのコロナ感染拡大やポジションの傾きが気がかりも時間での調整にユーロドルは高値圏でのみ合い継続を想定。				甲斐	ブル	1.2100 ～ 1.1800	コロナ感染拡大や緩和見直し議論が出るまでは、強い相場が続くと予想。ただし、USDに対する見方も見直しが進む中、上値も意識されるため、1.21を目指し、じりじりと更新していくと予想。
竹内	ブル	1.2100 ～ 1.1600	欧州での感染再拡大懸念が足枷となるも、独等で予想比上振れる経済指標が散見され始めており明るい材料。株価指数も出遅れ感が目立つ中、足許のドル安の受け皿として巻き返す可能性有り。				小野崎	ベア	1.2100 ～ 1.1600	米国比少ない感染者数や復興基金対応など買い材料も多いが、過去最大まで積みあがっているIMM通貨先物のユーロ買いポジションや1.20超えで見られるであろう達成感から今月は調整局面を見込む
筒井	ベア	1.2000 ～ 1.1700	米ドル安施策が強化されるだろうが、市場はすでに織り込み、ポジションは偏っている。8月同様引き続きレンジ相場。ECB/Fedによる金融政策にて相場が動く環境ではないと思われる。				玉井	ブル	1.2000 ～ 1.1700	FRBが大規模な緩和策を打ち出していることを背景に、引き続きドル売り優勢を予想。ただし、欧州でも新型コロナウイルス感染第二波が懸念されており、節目の1.20を前に上値も限定的となることを見込む。
加藤	ベア	1.2000 ～ 1.1500	ここまで選好され続けてきたユーロにも天井感が出てくると予想する。特に短期投機筋のポジションが史上最大規模に達している現状では、ここからユーロの上値を追いかけるのに無理があるろう。				原田	ブル	1.2000 ～ 1.1750	Fedの金融政策の指針変更を受けて、米国の緩和的政策が続くことが予想されるなか、ユーロ買いドル売りの流れとなろう。徐々に欧州圏の経済指標も改善傾向にあることもサポート材料。
山岸	ブル	1.2100 ～ 1.1700	米金融緩和長期化から米実質金利は低下しやすく、ドル売りの受け皿でユーロが選好される状況は継続。節目の1.20が近づき高値警戒感あるも、復興基金を評価するユーロ買いや欧米の景況感格差も、引き続きユーロ上昇のサポート要因。				大庭	ブル	1.2050 ～ 1.1800	先日のジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演を受けて米金利の低水準は長期化の見通しが強まった。更に安倍首相の辞任表明も、これまでの日米の良好な関係に不透明感が高まり、ユーロに対しドルが売られやすい展開か。
牛島	ベア	1.2000 ～ 1.1600	既にEURロングは溜まりすぎており、徐々にEUR売りが出てくる見込み。米株高、ドル安トレンドが一服すると、最も買われていたEURが真っ先に調整される通貨となる。1.19後半の上値は重く、その突破は困難。				上遠野	ブル	1.2000 ～ 1.1800	ジャクソンホール会合でFRBの当面の金融緩和と政策が再確認されたことでユーロは相対的に買われやすい展開継続か。新型コロナ第二波を巡る影響、相次いで打ち出した経済対策の効果検証にも注意したい。
田坂	ブル	1.2200 ～ 1.1700	Fed新フレームワークを背景とするドル安にサポートされ、ユーロドルは堅調推移。但し、1.20超えのタイミングでは、達成感から過去最大に積みあがったユーロロングポジション解消のきっかけとなるリスクがあり、注意が必要。				小林	ブル	1.2000 ～ 1.1700	欧州圏の経済指標が改善傾向にあることや、米国におけるFEDの金融緩和と政策の長期化、米中関係の悪化等の材料により、引き続きユーロ買いの展開を予想。一方で、1.20近辺では上値が意識される展開となるか。
尾身	ベア	1.2000 ～ 1.1500	復興基金を好感したEUR高は一服すると予想。低金利政策の長期化を受けた米株高や米国の追加財政対策への期待を背景に、ドル高ユーロ安が進行するのではないかと。				松本	ブル	1.2000 ～ 1.1700	米国の金融緩和が長期化することが示唆されたことによる、ドル安トレンドの中、ユーロが選好される地合いが継続しそう。ただし、節目である1.20に近づく場面では過熱感が意識され上昇の勢いは緩慢なものになりそう。
上野	ベア	1.2000 ～ 1.1500	5月以降、ユーロは対ドルで10%程度上昇しているが、ユーロが大きく選好されるほどの材料があるとは考えていない。ユーロの買い持ちが過去最高水準まで積み上がった状況での1.19台後半での足踏み。買い持ちの解消が意識される。				逸見	ブル	1.2000 ～ 1.1700	米の緩和的な経済政策が長期化するとの見込みからドル安傾向を想定。しかし、一方的なドル安が進行する可能性は低く、節目1.2付近では上値重い推移を予想する。
山口	ベア	1.2000 ～ 1.1600	欧州復興基金の合意を受けたEUR買いには一服感が出ており、1.19台後半での上値の重さも確認済み。ドル売りトレンドに調整が入るとユーロは下落しやすい展開を予想。				大谷	ブル	1.2100 ～ 1.1700	ジャクソンホールにてパウエルFRB議長は2%超のインフレ率を許容する方針を示しており、ドル売りの受け皿としてのユーロ買いは続くものと予想する。ただし1.20を超えるタイミングでは高値警戒感もあり、上値は限定的か。
							大熊	ブル	1.2100 ～ 1.1700	米国のゼロ金利政策が長期化すると観測に、日米の政局の不安定さも相俟って、ユーロの堅調地合いは継続。コロナ感染の再拡大は懸念されるものの、ワクチン開発への期待も後押しとなり、底堅い推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3100 ~ 1.3500
GBP/JPY 139.00 ~ 145.00

欧州資金部 マクルヒル ジョセフ

■ 先月の為替相場

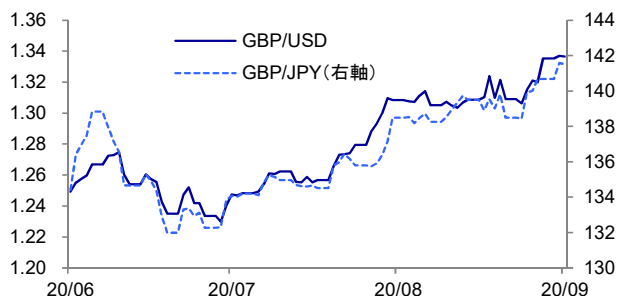
8月第一週目の英ポンド相場は、動意を欠いた値動き。唯一目を引いたのは4日に発表された米7月ISM製造業景況指数の市場予想以上の改善が好感され、対ドルでの一時的な下落。1.30台を割り込み1.2982まで下げる展開となったが、6日の英中銀金融政策委員会の結果発表に対する期待からか、反発。同結果発表では、全会一致(9対0)による基準金利、資産購入額上限の据え置きなどは市場の予想通りだったものの、ペイリー総裁がマイナス金利導入の可能性を(少なくとも現時点で)否定するとポンド高がさらに加速し、1.3185まで上値を切り上げ、7月末とほぼ変わらない水準まで戻した。週引けに掛け、対ドルでポンド下押しが進んだのは、7日発表の米7月雇用統計が、非農業部門雇用者数の増加が市場予想を上回るなど、予想対比で強めに出たことを受けたドル買いの結果と考えられた。第二週目と第三週目は、対円ではじりじりと水準を切り上げ、5か月半ぶりに140円台を突破したが、対ドルや対ユーロでは細かい上下動の繰り返しが継続し、振り返るとほぼ横ばいに終わった。日本円はこの間、主要通貨に対して明確に水準を切り下げており、全般的な円安の推移を見せた。17日にかけてポンドの下押しを誘ったのは、英固有の要因では、英国時間早朝に発表された一連の英経済指標が挙げられる。英4〜6月期GDP暫定値の前期比20.4%の落ち込みは、衝撃的と言える弱さだったものの、市場の予想にも沿った内容だった。英6月製造業・鉱工業生産もまちな結果となり、同貿易収支は強めに出了ものの、市場への影響は限定的だった。第4週目のポンド値動きは、荒い値動きを見せる局面はあったが、振り返ると、ユーロ・ドルに振られ、方向感に乏しい推移だったといえよう。対ドルで、19日に1.3266まで上昇し、年初来の高値を付けたが、その背景は、同日に、27か月ぶりに高値を更新したユーロのつれ高という解釈ができた。また、翌日に観測された、年内高値から1.30台の手前までの急落も、19日の英国時間夜7時に発表されたFOMC議事要旨を受けたドル高が要因と考えられた。この日は、YCC(イールドカーブ・コントロール)導入について否定的な見方が示され、ドルの買戻しが進み、ユーロドルも同じく下落した。

■ 今月の見通し

今月の英ポンド相場は、1.33台突破を予想。先月の後半は1.31と1.32でのこう着状態が継続したもの、1.31台を割り込むような気配は全く感じなかった。また、対ドルではポンドは8月28日にはついに1.3250を上抜けて(8月19日と21日に同レベルを試す値動きを見せたが、二回とも1.31まで反落)1.33台近くまで水準を切り上げた。対円でも、141円の半ばまで上昇し、2月末以来の高値を更新する局面もあった。対ドルでは、最後に1.31台と1.30台を割り込んだのは、それぞれ、8月24日と8月4日で、もはや昔のように感じられてしまう。対円でも140円はしっかりサポートされ、8月27日からの底堅い値動きからすると、定着しているともいえよう。もし8月の後半で観察されたドル安とユーロ高、そしてそれにつられるポンドの上昇が9月入り以降でも継続するとならば、対ドルでは2019年12月中旬の1.3331を上抜けて1.34台を目指すような展開も想定できなくもない。対円では、先月末に安部首相の辞任発表もあり、日本円の中期的上下動が困難になってきているなかで、当然、ポンド円の動きの予想しにくくなるが、(辞任発表後すぐの反応は円高だったが、後任の選出まで時間がかかったりする場合は、ドル円の下げが一転し円安になる可能性も十分にあると考えている)ポンドは今月1.3250以上を維持できるとするとドル円が105円の半ばまで円買いが加速しない限りは、ポンド円は140円を維持できる。英国内では、ロックダウンは7月4日以降概ね解除されており、今月11日(金)に英8月製造業/鉱工業生産、英8月貿易収支、15日(火)に英雇用統計(8月失業保険申請件数や5〜7月ILO基準失業率など)、30日に英第二四半期GDP確定値などの発表を控える。ここでは、ロックダウンの解除を受けて英経済が単体として、どの程度反発できているか注目されるであろうし、ヨーロッパ大陸(特に独、仏)と比べて、回復のペースも比較される可能性が高い。ただ、状況はまだ流動的で、コロナ禍の影響は単独の国/経済の最新動向だけを取り上げて通貨市場が材料視するのは容易でない、という見方でもできるし、圧倒的な差が観察されない場合は、通貨市場への影響は限定的かも知れない。

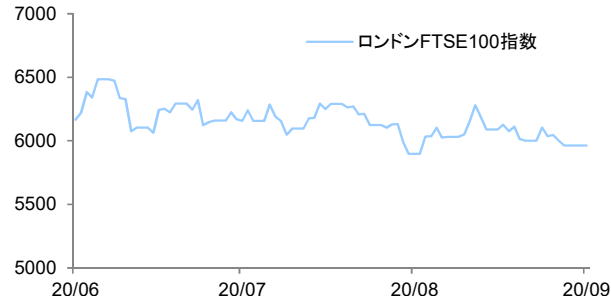
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	製造業PMI	7月	53.6	53.3	50.1
8/5	サービス業PMI	7月	56.6	56.5	47.1
8/6	英中銀政策金利	8月	0.1%	0.1%	0.1%
8/6	建設業PMI	7月	57.0	58.1	55.3
8/11	ILO失業率	6月	4.2%	3.9%	3.9%
8/12	製造業生産(前月比)	6月	10.0%	11.0%	8.4%
8/12	貿易収支	6月	£2600m	£5336m	£4296m
8/12	GDP(前期比)	2Q	-20.7%	-20.4%	-2.2%
8/21	小売売上高	7月	0.20%	2.00%	13.50%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7100 ~ 0.7400
AUD/JPY 75.60 ~ 78.60

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口志保

■ 先月の為替相場

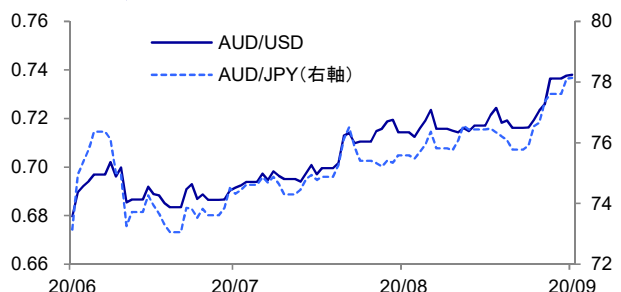
8月の豪ドル相場は、0.7077から0.73台後半で推移。上旬は0.70後半から0.72前半での推移となった。米7月ISM製造業景況指数が予想を上回り、ドル買いから豪ドルは0.7080近辺まで下落するも米株の上昇に伴い豪ドルは0.72台に載せた。RBA金融政策決定会合では政策金利据え置きが発表され、今後の展望に関して失業率は今年10%まで上昇、今後数年間は7%程度高止まり、インフレ率は今後2年間は目標(2~3%)を下回ると発表された。5日は強いNZ雇用統計を受け、AUD/NZD売りの展開に0.71台半ばとなるも、ドル安が進むにつれ上昇。6日、モリソン豪首相が会見で豪3QのGDPが2.5%下振れる事や今年失業率が10%まで悪化する等の見通しを示すと豪ドルは徐々に値を下げ、0.7175まで下落。RBA四半期報告書では悪化する現況をリマインドさせる結果となり、豪ドルは0.72割れへ。また、予想を上回る米7月雇用統計の裏で豪ドルはさらに0.71半ばまで下落した。VIC州メルボルンでのステージ4ロックダウン(都市封鎖)を受け、豪連邦政府は150億豪ドル(約1兆1,360億円)を投じ、一時帰休者を救済するため給与補助政策「ジョブキーパー」の対象範囲の拡大を発表。一方で、給与補助金の金額を11月と来年初めにそれぞれ段階的に削減するとしている。中旬はほぼ横ばいで推移し、後半にかけて再度0.72台へ載せた。豪7月雇用統計では失業率、雇用者数が予想より良好な数字となり底堅く推移するも、上値も抑えられたまま0.71半ばから後半で推移。その後豪ビクトリア州が非常事態宣言を9月半ばまで延長との発表を受けて、やや下落するも押し目買いからじりじりと上昇し0.72の上抜けに成功。7月FOMC議事要旨でイーールドカーブ・コントロールに消極的な姿勢が示されたことを受けて、米金融緩和強化の観測が後退し豪ドルは一気に0.71台へ下落。下旬は20日、前日のFOMC議事要旨を受けた米ドル上昇の流れを引き継ぎ、アジア時間にかけて売りが優勢に。米新規失業保険申請件数が予想外に増加したことを受けて米ドルへの逃避買いが強まる豪ドルは一旦0.7130台まで下落するが、株が上昇すると買い戻しの動きが入り0.7190台まで上昇。下旬は確実に下値を切り上げ、0.7150から0.73台後半へと上昇した。ジャクソンホールでのパウエルFRB議長発言を受けドル安となり、豪ドルは上値を追う展開となった。

■ 今月の見通し

9月の豪ドル相場は底堅い展開を予想。豪7月雇用統計が予想を上回る内容となったことでRBAの追加緩和観測が後退していることやロウRBA総裁が先週14日の議会証言で豪ドルの下落を望むとしながらも「現在の水準は過大評価されているとは言えず、為替相場を押し下げのために介入する用意はない」としていることも引き続き豪ドルの下値を支えるとみる。豪VIC州のロックダウン(ステージ4)の影響で今後9月に発表される豪2QのGDP等の豪経済指標は一段と悪化した数字が出てくると予想するが、足下では新規感染者数が低水準となっており、改善に向かっている模様。豪州は他国に比べ相対的にウイルス打撃が小さいとみられており、豪ドルは(消去法で)比較的回るややすくなっており、ドル売りの流れが継続すれば0.74台突入もあり得るとみる

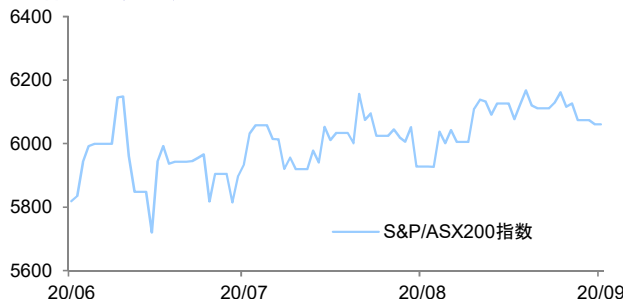
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
8/4	貿易収支 (A\$ mn)
8/4	RBAキャッシュレートの
8/4	小売売上高(前月比)
8/13	雇用者数変化
8/13	失業率
8/13	労働参加率

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
6月	A\$8800m	A\$8202m	A\$7341m
8月	0.3%	0.3%	0.3%
6月	2.4%	2.7%	16.9%
7月	30.0k	114.7k	228.4k
7月	7.8%	7.5%	7.4%
7月	64.4%	64.7%	64.1%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2800 ~ 1.3300
CAD/JPY 78.00 ~ 82.00

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

8月は1.3440でオープン。新型コロナウイルスへの経済対策への資金供給を受け、安全資産としての米ドルの需要は低下。そうした中、米中対立や米金利の低下に伴いドル安傾向は加速。カナダドルは1月以来となる1.31台まで上昇。原油価格も40台前半での堅調な動きをみせており、総じてカナダドル高が続く月となった。7日カナダ7月の雇用統計は、雇用者数が市場予想を上回り41.85万人増だったが、伸びは前月の95.29万人から鈍化。失業率は11%と、前月の12.3%からやや改善した。米国7月雇用統計では、雇用者数が前月から176.3万人増と3カ月連続での増加。失業率も10.2%へと低下。良好な経済指標と米金利上昇も相まってUSDドル買いが進みUSD/CADは1.3399へと上昇。米政府が香港政府トップ11名に制裁を科すとの報道や米上院が中国系の動画投稿アプリを連邦政府職員が政府支給の端末で利用することを禁止する法案が可決されるなど、米中関係の緊張が高まると、リスク回避のUSDドル買いとなりUSD/CADは1.33台後半でのみ合いを続けた。11日ロシアが世界に先駆けて新型コロナウイルス感染症ワクチンを認可したとの報道があり、リスク選好のドル売りに転じる。カナダドルは1.3271まで買い戻される場面があった。原油価格(WTI)も42.94まで反発し、その後も強含みで推移。カナダドルは1.31台を割り込んだ。14日カナダ6月の製造業売上高は前月比と市場予想を伴い上回り、20.7%増と過去最大の伸びとなるも、市場の反応は限定的。17日カナダのモルノー財務相が辞任し、USD/CADは一時1.3232をつけるが、米エネルギー省の週間石油在庫統計で、原油在庫の減少が確認され、原油価格上昇を材料に再びカナダドルは1.3133まで上昇。27日FRBのパウエル議長の講演では雇用や物価への下方リスクが高まったとし、長期的にインフレ率を平均2%に維持し、米国の完全雇用の回復を目指すとした。また、一時的にインフレ率が2%を上回ることを容認する意向も示した。USDドル安は更に進行し、1.3107まで下落した。

■ 今月の見通し

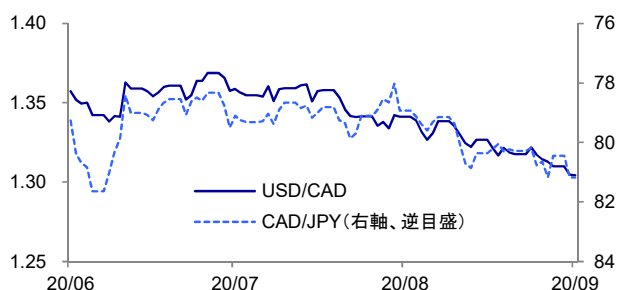
米国の新型コロナウイルス感染者数は地域によって増加傾向にあり、3月に導入された、米国、カナダ、メキシコの国境閉鎖が新たに30日延長される。米加関係は、トランプ米大統領が、カナダから輸入するアルミの一部に10%の追加関税を発動すると表明。その報復措置としてカナダも米国から輸入するアルミに対する36億カナダドル(27億米ドル)の関税を9月16日までに発動すると発表。6月のカナダ貿易収支の赤字は大きく拡大しており、米加貿易での軋轢が懸念される。カナダのモルノー財務相が辞任を表明。後任に副首相のフリーランド氏が起用され、副首相と財務相を兼任する。新型コロナウイルス対策により、カナダの今年度の予算赤字は3432億カナダドル(2534億米ドル)に上る中、新財務相の手腕に期待が集まっている。9/23にトルドー首相のThrone Speechが予定されており新政策が発表される。トルドー首相は経済回復に向けた長期計画や新型コロナウイルス感染拡大での赤字対応策の必要性を示唆。また、雇用保全強化や、化石燃料に大きく依存するカナダ経済への見直しに焦点があてられるようだ。新財務省フリーランドも「カナダ経済の再始動は環境に優しいものである必要がある」と述べており、エネルギーシフトやカナダのオイルサンド事業への新政策が盛り込まれそう。また増税はないとされており、支出と債務がこれまで以上に膨らむと予想される。それが将来的には米ドルやG10通貨に対してカダドル安へと推移するのではないかと考えられる。金利の低下により住宅市場回復への期待がある中、経済指標からも良好さが見られている。コロナ以前は移民による需要がカナダ経済を回復させる要因と言われていただけに、コロナ禍で移民流入が抑制されている中、今後の住宅需要に関する指標には注視していきたい。原油に関しては、中国やアジア諸国の原油需要回復への期待や、米原油在庫の減少や主要産油国による減産努力により原油価格の下げは限定的になると推測される。引き続き新型コロナウイルスの感染拡大状況や米中対立、米中貿易交渉にも注目したい。9日、カナダ中央銀行政策金利決定会合が開かれる。市場の予想では金利据え置きとの見方が強い。今月も米ドルの長期下落傾向に、カナダドル高が続くと思われる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』
『地球の歩き方』は初めてカナダを訪れる方にはわかりやすい格好の情報や、訪れたことのある人達からの行き届いた情報が掲載されています。またカナダ東部、西部、州ごとの刊行もいくつかあり、それぞれ地域色あふれる内容になっています。「カナダ検定」と銘打った101のクイズに答えながら楽しく学べる本もあり、これは好奇心旺盛な方にお薦めです。多民族国家であるカナダは食文化も多様化しており、「カナダ食って何?」と問われる方には「おいしいカナダ」という本はいかがでしょう。名産であるメープルシロップとサーモンに焦点を当てて、カナダの食文化を紹介しています。食を通して見るカナダの歴史や人々の交流にまつわるエピソードからカナダらしさを体験していただけたと思います。各地のローカルフードやB級グルメ、ファーマーズマーケットやワインのことなども盛りだくさん。ワインカントリーとしてのイメージは乏しいかもしれませんが、カナダには700ものワイナリーがあります。気候変動と温暖化によりブドウ栽培に適した環境が得られている事と、ヨーロッパなどからの醸造家の移住により、カナダのワイン業界の発展は近年めざましいものがあります。ワイナリーはフランス、イタリア、ドイツ系など多種多様。これにカナダ特有のワイナリーもあり、製品開発など常に変化していて、その動きには興味が尽きません。ここでワインと料理の妙味に舌を巻く「ワインソムリエが教える〜カナダ一人旅」をどうぞお手にとってみては如何でしょう。

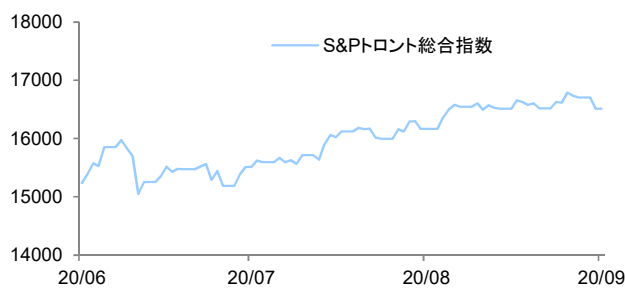
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/4	カナダ製造業購買担当者景気指数 (PMI)	6月		52.9	47.8
8/5	貿易収支	6月	-0.90b	-3.19b	-1.33b
8/7	雇用者数変化	7月	380.0k	418.5k	952.9k
8/7	失業率	7月	11.0%	10.9%	12.3%
8/11	住宅着工件数	7月	205k	245.6k	212.1k
8/14	鉱工業売上高	6月	16.4%	20.70%	11.60%
8/19	消費者物価指数 (YOY)	7月	0.5%	0.1%	0.7%
8/21	小売売上高 (前月比)	6月	24.5%	23.7%	21.2%
8/28	GDP (前月比)	6月	5.8%	6.5%	4.5%
8/28	GDP (第二四半期)	2Q	-39.6%	-38.7%	-8.2%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1160	1210
KRW/JPY	8.696	~ 9.174
JPY/KRW	10.900	11.500

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

8月のドル/ウォン相場は、1180~1196の範囲内で上値の重い展開となった。7月最後の週末は、7月に進出したドル売りに巻き戻しが入り、ドル/ウォンは上昇。3日は1.194.2にてスタートし、その後すぐに月高値の1,196.1まで上昇した。しかし、米追加景気対策案が決まっていなかったこともあり米景気への懸念がぬぐえない中、再びドル売り優勢となり、5日にはアジア通貨全般がドルに対し買われる中、抵抗線となっていた1,190レベルを明確に下抜け。5日海外時間には米大手製薬企業が米政府とワクチン候補1億回分を供給することで合意したとの報道、米追加景気対策の進展期待が優勢となる中、世界的なリスオンムードとなり、ドル/ウォンも1,183.0まで下落した。7日には米国が香港政府に制裁を科す等米中対立懸念が広がったものの、比較的好調な中国指標等を材料に中国株が堅調に推移すると、この週はドル/ウォンは1180台前半で小幅な値動きとなった。8月第3週には韓国内のCOVID-19拡散が徐々に意識されだし、ドル/ウォンの下値が堅くなると、18日にCOVID-19新規患者数が200人を超えると発表された後、1,186.3ウォンまで上昇するも海外時間に米S&P500が過去最高値を更新する中、リスクオンのドル売りとなり19日には月安値1,180.5まで下落した。しかし、1,180レベルでは実需のドル買いも相応に入ったため1180は下抜けできず。さらにFOMC議事要旨で、メンバー数人がイーランドカーブ・コントロールの利点は小さいと考えていることが明らかになると、追加緩和期待が後退しドル売りの巻き戻しが入った。21日には週末からのドル買いの流れを受けて1,192.7まで上昇する局面もあったものの、その後は月末にかけて実需のウォン買いが入り上値の重い展開。28日にはパウエルFRB議長による講演をへて、材料出尽くし感から世界的には利益確定のドル買いが優勢となっていたものの、ウォンについては実需フローの影響を受けて上値の重い展開は変わらず。しかし、31日に外国人投資家からKOSPIに大きく売りが入る中、ドル/ウォンは反発。結局31日は1187.8でクローズ。

■ 今月の見通し

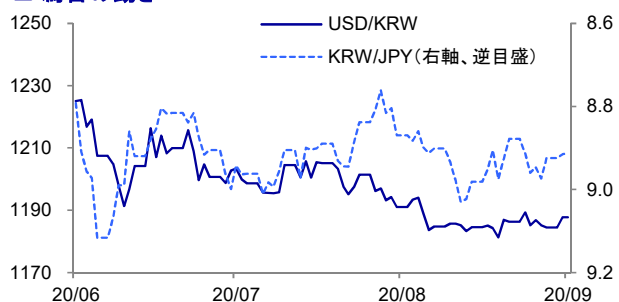
9月のドル/ウォン相場はやや上値の重い展開を予想する。市場のメインドライバーはコロナウイルスの第二波感染拡大とワクチンの開発に対する期待感の混在が続くと考えられる。韓国については第二波に見舞われつつあり、「社会的距離の確保」のレベル引き上げ懸念からドル/ウォンが一時的に上昇する可能性はあるものの、パウエル議長がFRBによる緩和的な姿勢は長期間続くことを示唆したことからも、世界的なドル売りが続くと考えられ、ドル/ウォンの上値を重くする材料となろう。そのほか、米大統領選については民主党は公約として法人税率の引き上げおよび環境政策としての規制強化を入れており、民主党優勢となった際にはこどもと堅調に推移している米株に調整が入る可能性はあるものの、非常に緩和的な金融政策の環境下では、3月のような暴落になるとは考えにくく、むしろ押し目買いのタイミングとなるのではなかろうか。かかる状況下、韓国株式にも外国人の買いが入ることが期待されよう。また半導体業界自体は昨年の縮小傾向から需要が戻りつつあり、中長期的に見ても5GやIoTへの期待需要から業績は回復してくることが期待でき、こちらもウォン買い材料となってくるのではなかろうか。金融政策については、しばらくは米韓ともに様子見ムードを予想。FRBは平均インフレ率が2%になるまで現在の緩和的な姿勢を続けることを示唆している一方で、イーランドカーブ・コントロールの効果について懐疑的であり、FRBはしばらくはコロナウイルス対応として導入した債券購入プログラムの買い入れ条件を調整することで緩和を図ると思われる。韓国は5月28日の会合で利下げをした際に、総裁が政策金利は実効下限に近いとの姿勢を表明している。8月27日の会合では今年の成長率見通しを▲0.5%から▲1.3%以下に引き下げたものの、追加の緩和には慎重な姿勢を崩しておらず、金融緩和起因によるドル/ウォンの変動は限定的となろう。かかる状況可、ドル/ウォンは徐々に下落していくことを想定する。しかし、レンジ下限として意識されている1,180付近では、水準感から実需のドル買いフローが相応に入ってくると考えられ、下抜けするにはある程度の時間がかかるだろう。なお、次の下限目途として1160が意識されるものの、こちらについてはよほどの材料がない限り下抜けは難しいと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』
当地に赴任される方におススメの本は、「1時間でハングルが読めるようになる本 ヒチョル式超速ハングル覚え方講義」です。当地では街中ハングルで溢れており、英語が通じない場面が相応にあります(ソウルの街中でも、レストランやタクシーでは通じないときがあります)。一方で、韓国語は日本語と語順が同じであることや、同じ漢字圏であるため、似た単語がたくさんあります(例えば、弊行ソウル支店のそばにあるソウル市庁は韓国語で「서울 시청」と書き、「ソウルシジョン」と読みます)。つまり、ハングルさえ読めてしまえば単語を知らなくてもある程度類推ができるというわけです。
ハングルは、「ㄱ」や「ㄷ」といった母音パーツと「스」や「ㅁ」といった子音パーツを組み合わせて文字ができております。それぞれの形が発音の仕方を示しているため、パーツの組み合わせを見ればひらがなのような感覚で読むことが可能です(例えば、「로」がmに相当する子音であり、「ㄷ」がaに相当する母音であるため、合わせて「마」(ma、つまり日本語の「ま」になります)。ここまではすごく簡単です。しかし、韓国語の場合、母音も子音も日本語より多いため組み合わせの数が、400近くになります。さらに、日本語と異なり1文字に子音が2つ、3つつくものもあります。そこでご紹介した「1時間でハングルが読めるようになる本 ヒチョル式超速ハングル覚え方講義」が役に立ちます。この本では、ハングルの組み合わせが日本語のひらがなの対比で解説されているほか、主に使う組み合わせがよく使う単語と一緒に載っていて最初に手に入る本としては最適です(もちろん韓国旅行に来る方にもおすすめですね)。いつか来るであろうコロナ禍明けには駐在の方にも、そうでない方もこの本をもって是非韓国に遊びに来て下さい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	輸入(前年比)	7月	-11.5%	-11.9%	-11.2%
8/1	輸出(前年比)	7月	-8.3%	-7.0%	-10.8%
8/1	貿易収支	7月	\$3333m	\$4270m	\$3621m
8/4	CPI(前年比)	7月	0.3%	0.3%	0.0%
8/12	失業率(季調済)	7月	4.3%	4.2%	4.3%
8/25	消費者信頼感	7月	-	88.2	84.2
8/26	韓国銀行政策金利発表	7月	0.50%	0.50%	0.50%
8/31	鉱工業生産(前年比)	7月	-2.0%	-2.5%	-0.5%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 29.20 ~ 29.55
TWD/JPY 3.55 ~ 3.65

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

8月のドル/台湾ドルは台湾加権指数が高値圏で推移するも、レンジで推移した。

ドル/台湾ドルは29.510でオープン。月初は台湾からの出国者で新型コロナウイルスの感染を確認。台湾域内での感染拡大が警戒され、台湾株が下落すると、29.330付近で推移していたドル/台湾ドルは29.400付近まで戻した。その後は、ハイテク銘柄を中心に株は買い戻され、8/6には台湾加権指数が13,000ポイントに迫ると、台湾ドル買いが優勢となり、一時29.301まで下落。月半ばは台湾株が伸び悩む中、29.400を超えると輸出企業の台湾ドル売りが入り、29.400付近の狭いレンジでの推移が続いた。月後半に入ると、米国による対中制裁を受けて台湾企業の中国企業向け販売が減少するとの懸念から、台湾株が急落。これを受けて外国人投資家が台湾ドル売りを強めたが、29.400台では輸出企業のドル売りに押さえられ、ドル台湾ドルの上値は重い展開。その後は月末に近づくにつれて徐々に輸出企業の台湾ドル買いが優勢となりレンジを切り下げ、29.350付近で推移した。

■ 今月の見通し

9月のドル/台湾ドルはドル安台湾ドル高を見込む。

台湾の第2四半期GDPは上方修正されたものの、▲0.58%とマイナスは変わらず、台湾行政院主計総処は2020年の実質GDP予想を1.56%と5月の予想より、0.11ポイント引き下げた。要因としては、新型コロナウイルスによる訪台旅行者の消失の長期化を考慮したものである。しかし、足許の台湾の経済指標については、明るい兆しが見える。7月の輸出は前月比+0.4%と5か月ぶりに前年同月比プラスに転じ、小売についても政府の施策もあり、前年比プラスに転じている。また、7月の輸出受注額は前年比12.4%増と7月の過去最高額を更新。コロナ禍であってもリモートワークの増加により電子部品関連企業が、引き続き好調である。台湾加権指数については、7月に最高値を更新。8月は終値でも最高値を更新をしたものの、利益確定の動きもあり、伸び悩み、先月ほど急激な台湾ドル買いには繋がっていない。ただし、台湾株が売られた局面で台湾ドル売りが入っても輸出業者の台湾ドル買いが入るためドル/台湾ドルの上値も重かった。9月については四半期末であり、月末付近での輸出企業のドル売り圧力が警戒をしたい。6月末は好調な輸出企業のドル売り圧力が強まり、急な台湾ドル高が進んだ。米中関係、新型コロナウイルスだけでなく、9月はより実需の動きに注視したい。

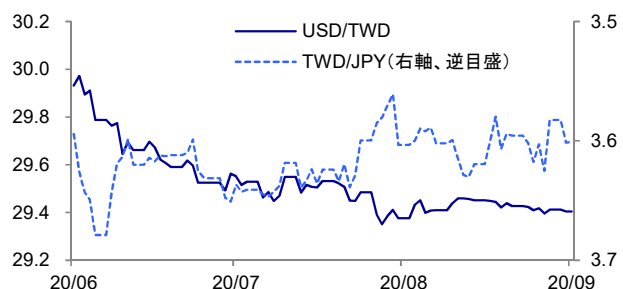
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』

先日、NHKでドラマ化されました「路(ルウ)」はいかがでしょうか。台湾の高速鉄道に日本の新幹線が採用され、開通までを人間模様を含めて描いた小説になります。主人公は、台湾の高速鉄道が入札で新幹線に決定したことで2000年から台湾で駐在を始めます。台湾での仕事や日常生活が描写されており、駐在員の暮らしをイメージすることができます。また、主人公は日本に恋人を置いてきており、日本と比較的近い海外での遠距離恋愛をしています。独身者にはこの辺も参考になるかもしれません。また、登場人物には台湾の若者も出てくるので当地の暮らしも知ることができますし、戦前に台湾で暮らしていた方も出てくるため、台湾の現代史も少しは理解できます。こんな時期なので、すぐに駐在に行けるか分からない方は、小説を読んで、NHKのドラマを見て、具体的なイメージをしていただくのもいいかもしれません。(なお、私はNHKのドラマは見えていません)

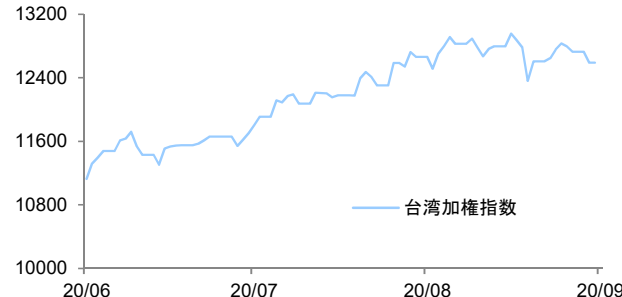
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	外貨準備高	7月	-	496.17B	488.69B
8/6	CPI(前年比)	7月	-0.45%	-0.52%	-0.77%
8/7	輸出(前年比)	7月	-1.4%	0.4%	-3.8%
8/7	輸入(前年比)	7月	-3.1%	-6.8%	-8.6%
8/7	貿易収支	7月	4.24B	5.37B	4.84B
8/20	輸出受注(前年比)	7月	3.1%	12.4%	6.5%
8/24	失業率	7月	3.90%	3.90%	3.97%
8/24	鉱工業生産(前年比)	7月	3.50%	2.65%	7.19%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7500 ~ 7.7600
HKD/JPY 13.40 ~ 13.95

■ 先月の為替相場

【8月の香港ドル直物相場】

8月の香港ドル相場は、投資家によるIPOへの強い資金需要や好調な中国ハイテク企業株への資金流入を受け、香港ドル高の取引バンド上限となる7.7500付近での値動きが継続。HKMAはペッグ制防衛の為、香港ドル売り米ドル買いの為替介入を実施したが、7月に比べるとその規模は小さかった。

米国の香港自治法の下で、トランプ大統領は香港政府の最高責任者であるキャリー・ラム行政長官を含む11人の主要閣僚らに対して米国内資産を凍結するなどの制裁を科した。メディアでは一部香港の銀行が制裁対象者の口座を一時凍結するように動いたと報じられた一方で、中国銀行保険監督管理委員会(CBIRC)は香港で事業を展開し、規制に従いながら住民や企業にサービスを提供する金融機関に対して支援を提供すると表明した。香港の優遇措置を廃止する手段として、トランプ大統領は香港との犯罪人引き渡しや船舶の国際航行に伴う所得の課税免除の停止を通知した。

【8月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利はHKMAによる流動性供給が大幅に減少したことによって月中は安定推移、月末にかけてはIPOへの資金需要を受けて短期を中心に上昇した。1か月物の香港ドルHIBORはHKMAによる介入ペースが減速する中、0.25%台付近での推移が継続した後、月末は0.35%超えまで急騰。HKMAによる為替介入規模は縮小したものの、アグリゲートバランスは7月末の1,830億香港ドルから1,930億香港ドル程度まで緩やかに上昇した。3か月物の香港ドルHIBORは0.45%付近での小幅推移となった。また、FRBが市場期待ほどハト派色が強くなかったこと、米国債入札が低調な結果となったことや、ジャクソンホール会合でのパウエル議長の講演を受け、上昇した米金利スワップレートに追随し、香港ドル金利スワップレートも上昇した。

■ 今月の見通し

【9月の香港ドル直物相場】

9月の香港ドル相場はIPO需要と香港株への継続的な資本流入に支えられ7.7500-7.7600の取引レンジでの底堅い推移を予想。米中関係の悪化を懸念し、米国の取引所に上場している中国企業は上場廃止リスクを軽減するための策として香港への重複上場を急いでおり、IPOに関するフローは年末まで継続するものと思われる。これまでのところ、好調な中国ハイテク部門などに起因するストックコネク（中国本土市場との株式相互取引制度）による香港株買いのフローは堅調となっている。一方で、香港ドルと米ドルの金利差が縮小傾向である為、キャリートレードによる投資妙味は薄れてきている。

また、香港ドルの米ドルペッグ制度は引き続き維持されたと考えている。トランプ大統領による香港の優遇措置の廃止や香港高官らに対する制裁があったにも関わらず、香港の金融及び銀行業務への影響はこれまでのところ限定的である。トランプ政権は金融制裁により米国の銀行や米ドルの準備通貨としての地位が損なわれる可能性があるため、香港ドルの米ドルへの自由な交換を制限したり、香港ドルのペッグ制を弱体化させたりはしないだろう。結局のところ、香港の諸問題に関するトランプ大統領による制裁リスクは、11月の大統領選挙を睨んだ対中強硬姿勢の強調に活用されていることを考慮する必要がある。

【9月の香港ドル金利市場】

9月の香港ドル金利は小幅上昇を予想する。中国大手電子商取引企業の子会社の大型IPOや四半期末フローによる金利上昇が見込まれるが、アグリゲートバランスは2018年2月以来の高水準となっており、潤沢な流動性が維持される中、上昇幅は限定的となると予想する。

中長期的にも、ペッグ制の下で香港ドル金利は米金利に追随し、上昇していくと考える。ジャクソンホール会合でFRBは「平均インフレ目標」を導入し、足許は米金利が上昇、9月のFOMCにも注目が集まる状況。今後、長期・超長期ゾーンにおいて米金利は上昇していく可能性があり、香港ドル金利も追随し上昇していくことを想定している。

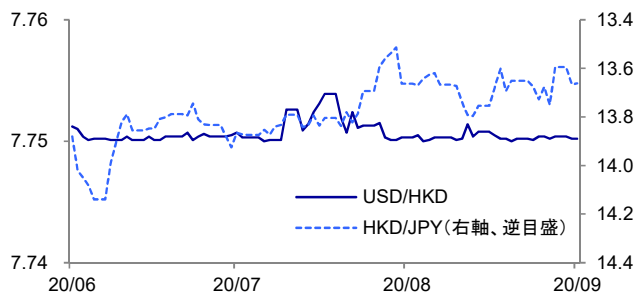
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』

初めての都市に赴任する前に、現地の文化に対する理解を深めておくことは良いことです。世界各国の料理を知るものとして王道ではありますが、香港の食文化やレストランを調べる方法としてミシュランガイドを読むことをおススメします。この本を持っていればレストランの探索にも役立ちますし、現地のスタッフとの会話も盛り上がりそうです。コロナウィルスの流行下では、多くのレストランが営業を停止している可能性があるため、訪問時には通常通り営業しているか事前に確認する必要があります。

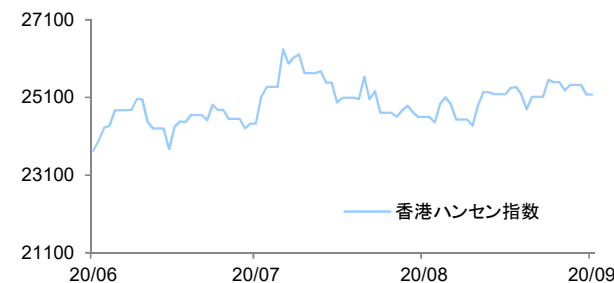
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	日経香港PMI	7月	--	44.5	49.6
8/7	外貨準備高	7月	--	\$450.0b	\$445.9b
8/14	GDP(前年比)	2QF	-9.000%	-9.00%	-9.00%
8/14	GDP(季調済/前期比)	2QF	-0.10%	-0.10%	-0.10%
8/19	失業率(季調済)	7月	6.40%	6.10%	6.20%
8/20	CPI(年率)	7月	0.50%	-2.30%	0.70%
8/26	輸出(前年比)	7月	-3.00%	-3.00%	-1.30%
8/26	輸入(前年比)	7月	-5.80%	-3.40%	-7.10%
8/26	貿易収支(HKD)	7月	-20.8b	-29.8b	-33.3b
8/26	総合利率	7月	--	0.53%	0.71%

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.8000	～	7.0500
	CNY/JPY	14.47	～	15.62
	100JPY/CNY	6.4000	～	6.9100

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 矢野 慧

■ 先月の為替相場

8月のUSD/CNYは下落した。

月初6.98近辺でスタートしたUSD/CNYは、中米が高官級通商協議を8月中旬に行うとの報道を受けて、6.93台まで人民元高が進行。その後米国が一部に米中資系企業の排除姿勢を強める中、6.96台へ戻す展開。

中旬にかけては、通商協議への期待感や、米FRBの緩和長期化期待からドル安人民元高が継続。中旬に予定されていた通商協議が一時延期となったことや発表されたFOMC議事録(7月開催分)が市場の期待よりハト派の内容でなかったことから、小幅な反発を見せる場面もあったものの、その後もドル人民元は上値重く推移し、21日には一時6.90を割る水準へ。

月末にかけては、延期されていた中米高官級通商協議が開催され、両国の通商合意履行に対する姿勢が確認できたことに加えて、27日には中国が2020年に米国産大豆を過去最大量購入見込とのポジティブな報道が伝わると元高が加速。ジャクソンホールでのパウエル議長講演にて緩和の長期化が示唆されたこともドル安材料になり、ドル人民元は6.84台迄水準を下げた。

■ 今月の見通し

9月のUSD/CNYは上値重い推移を予想する。

米国は緩和政策の長期化を示唆した一方、中国当局は景気下支えのために積極的な資金供給を実施しているものの、貸出先の企業規模に応じた金利設定(MLF、中期貸出制度)の実施や、銀行規模に応じた預金準備率(RRR)の引き下げなど、供給ターゲットを絞り過剰流動性を避けるようにコントロールを行っている。また、毎月公表される貸出金利のベースとなるLPR(ローンプライムレート)は4ヶ月連続の横ばい設定されている。コロナウイルス感染拡大から広がっていた緩和期待の剥落から人民元市場金利はすでに新型コロナウイルス感染拡大前の水準に戻りつつある。

新型コロナウイルス危機対応から正常化への転換が他国に先んじて進んでおり、米中の金融政策格差、ファンダメンタルズが意識されやすく、相対的な人民元のサポート材料となり、中長期的には元高地合いを予想する。

リスクシナリオとしては、米中通商問題について両国が合意履行について確認してはいるものの、香港や南シナ海、在米中資系企業を巡って対立が進んでおり、中米関係悪化による元安進行の可能性を無視はできないだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』

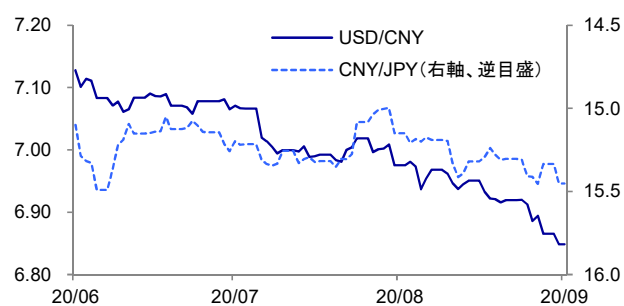
当地に赴任なさる方におススメする本は、日本で大人気の漫画作品「キングダム」です。紀元前3世紀、古代中国の戦国春秋時代を舞台にして、後の始皇帝となる秦王政と秦の武人である李信の活躍を中心に描かれている、中国時代劇です。

中国には沢山の観光地がありますが、中国4千年の歴史と言われるように、歴史にまつわる観光地が多いです。その中に日本人にも有名な観光地で西安の兵馬俑があります。この兵馬俑は始皇帝の墓である始皇帝陵の一部を成しています。さらにこの兵馬俑がある場所は、ネタバレになるので詳しくは書きませんが、戦国春秋時代の”葛”なのです。これを知っただけでも行きたくなる方多いのではないのでしょうか？さらに西安の近くには「キングダム」に出てくる地が沢山。「キングダム」を読んだ上で訪れれば、興奮すること間違いなしです。

漫画に限らず、ある程度歴史を調べてから観光地を訪れることで、いつも以上に楽しむことができると思います。「キングダム」以外にも「三国志」など、中国の歴史を描いた作品は多くあり、舞台となった観光地が当地には沢山。当地に赴任なさる方はそういった作品を読んで、中国の歴史に目を向けて見るのも良いと思います。

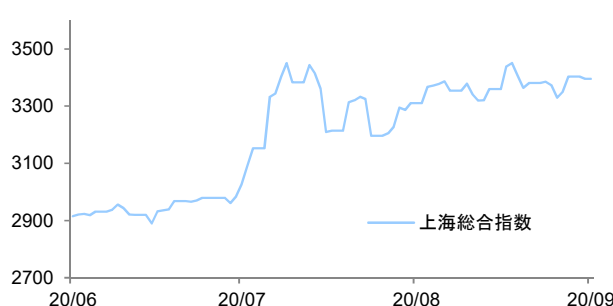
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	財新・製造業PMI	7月	51.1	52.8	51.2
8/5	財新・サービス業PMI	7月	58.0	54.1	58.4
8/7	貿易収支	7月	\$42.60b	\$62.33b	\$46.42b
8/10	PPI(前年比)	7月	-2.5%	-2.4%	-3.0%
8/10	CPI(前年比)	7月	2.6%	2.7%	2.5%
8/14	鉱工業生産(前年比)	7月	5.2%	4.8%	4.8%
8/14	小売売上高(前年比)	7月	0.1%	-1.1%	-1.8%
8/14	都市部固定資産投資(年率)	7月	-1.6%	-1.6%	-3.1%
8/31	製造業PMI	8月	51.2	51.0	51.1
8/31	非製造業PMI	8月	54.2	55.2	54.2

シンガポールドル相場

予想レンジ:

USD/SGD 1.3400 ~ 1.3900
SGD/JPY 76.00 ~ 79.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2020年8月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高が進行。

7月、USDに対し大きく上昇していたSGDは、先月の流れを引継ぎ月初より堅調推移。米金利の低下と金価格の上昇を受けてUSDが下落するなか、SGDのみならず、新興国通貨は総じて上昇。

その後6日、トランプ米大統領が中国のIT企業2社との取引を禁じる大統領令が署名されたことを受けて、米中問題の懸念が高まると共に新興国通貨は軟調に。米国にて、新型コロナウイルス感染拡大を受けた追加経済対策を巡り、米国内の調和が見られず、追加経済対策への期待が後退しUSDが弱含む場面もあったが、トレンドを形成するほどの強い材料とはならなかった。USD/SGDは月半ばにかけて1.37台前半でのレンジ推移となった。

その後19日にかけて、米政府が中国通信機器大手の半導体輸出規制を強化すると発表し、米中対立への懸念が再び高まる中、USDは大きく下落。USD/SGDは1.36台前半の水準まで下落した。

しかしその後、19日に発表された米FOMC議事要旨では、予想に反し追加緩和への思惑が後退したことよりUSDは反発。SGDは売られ、USD/SGDは1.37台まで上昇。更に、21日発表の米経済指標が強い結果を示したことも相まって、USD/SGDは一時1.37台後半の水準まで上昇。

その後は米金利の低下、並びに米中貿易協定の進展を材料に新興国通貨に持ち直しの動きが見られ、SGDは上昇。現在、USD/SGDは1.36前後の水準で推移している(8月28日現在)。

■ 今月の見通し

2020年9月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高の進行を予想。

SGDは前回の金融政策変更以降上昇を続けており、次回10月に予定されているMAS会合にて、更なる金融政策の変更が行われるかに注目が集まっている。

前回の半期会合で金融政策を緩和したMASは、中期的な物価安定を確保する観点からコアインフレを注視している。現在、MASと貿易産業省(MTI)は、通期のインフレ予想をヘッドライン、コアインフレともに▲1%からゼロの間で据え置いている。掛かる中、宿泊施設や民間の道路交通費を除いた全品目とコアインフレ率の直近実績は▲0.4%と、見込内には収まっている状況。

同インフレ率は今四半期で底打ちが予想されている。加えて、今次ようやくブルネイ、ニュージーランド、マレーシア、中国本土からの入国旅行の制限を緩和されたことから、年後半にかけてシンガポールの観光産業の回復が期待され、デフレペースの改善が期待される。

また、GDPについてだが、MTIは今月のGDPの説明会にて、外需の弱さを指摘した。外需については為替レートが大きく関係しているため、外需の低迷に対応するために為替政策を変更することがより適切なツールとなり得る。しかし、他国と異なり為替による金融政策を強いているシンガポールにおいて、同金融政策転換の障壁は相応に高く、前述のコアインフレが当局予想対比大きく下振れるような悪材料がない限り、まずは現状の財政政策による支援が継続される展開を予想する。

同国独自の材料による相場への影響は限定的ながら、追加金融緩和観測が遠のくこと自体はSGD高材料。メインピックスは米中情勢次第ながら、ダウンサイドに触れることさえなかりせば、9月のSGDは8月に続き堅調推移となろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』

シンガポールにいらっしゃる日本人の方は、一時滞在や駐在でも単身・ご家族帯同など様々な方がいらっしゃるのではないかと思います。また、日本との関りやシンガポールの発展の歴史を解説する本も結構出ております。その中で、以下三つをご紹介します。

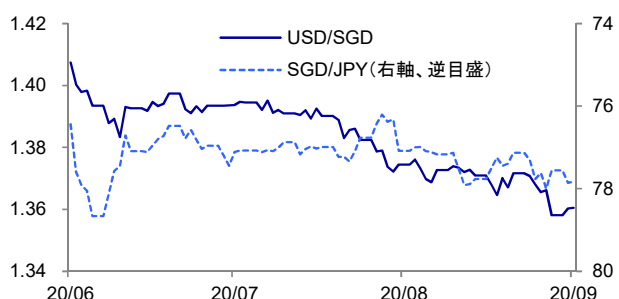
「シンガポールとビジネスをするための鉄則55」という本では、ビジネスと記載されているものの、当地の基本的な生活情報が網羅されております。日本で準備しておくこと、現地での生活基盤を整えるには、シンガポール社会を理解する、と章が分けられており、赴任前後には助かります。また、出張者向け、駐在向け、家族帯同向け、単身向けに必要となりそうな情報が分けて記載されているので、手短かに必要な情報を確認するには便利の一冊だと思います。

また、海外生活には慣れていて大抵のことは大丈夫、少し時間的に余裕がある、もっと深くシンガポールを知っておきたい、と言う方には「シンガポールを知るための65章」、または、「なぜ？シンガポールは成功し続けることができるのか」がおすすめです。少しボリュームがありますが、ビジネス視点で読んだ見ると、現地の歴史や文化的な背景などに触れる事が出来ると思います。

また、赴任前は何かと忙しく、本を探す暇や余裕もない、ということもあるかもしれません。シンガポールにある日本人会には図書館も入っており、シンガポール関連の書籍を集めたコーナーもありました。ご紹介した本のいずれも借りる事が出来そうだったので、来星後に少し時間が出来た際に改めて読むことも出来ると思います。(アジア・オセアニア資金部:福田)

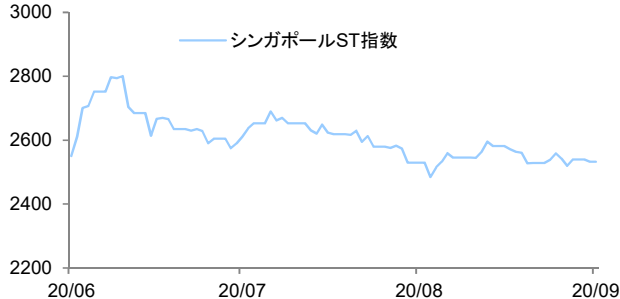
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	小売売上高(前年比)	6月	-28.5%	-27.8%	-52.0%
8/11	GDP	2Q F	-12.9%	-13.2%	-12.6%
8/17	非石油地場輸出(前年比)	7月	3.6%	6.0%	13.9%
8/24	CPI(前年比)	7月	-0.6%	-0.4%	-0.5%
8/26	鉱工業生産(前年比)	7月	-7.3%	-8.4%	-6.5%

タイパーツ相場

予想レンジ:

USD/THB 30.70 ~ 31.80
THB/JPY 3.32 ~ 3.48

アジア・オセアニア資金部 パンコック室 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

月初、8月3日のドルパーツは31.20付近でスタート。先月末からの軟調な流れを受けて、4日以降に下げ幅を拡大させ、5日にかけて31.00付近へ下落。5日のタイ中銀金融政策委員会(MPC)では、全会一致で市場予想通り政策金利0.50%の据え置きが決定され、足許のパーツ高による景気回復への影響を懸念しているため、状況を監視して必要な措置を講じる用意があると牽制したことなどから、底堅く推移した。翌6日は米追加経済対策法案の可決への期待からのドル買戻しや、タイ7月CPIが-0.98%と5か月連続で前年を下回る弱い結果に31.10付近へ上昇。7日は米7月雇用統計が市場予想を上回り失業率も低下したことで、31.20付近へ上昇した。翌週10日は海外時間に一部企業の好決算が牽引する堅調な株価や米政権と議会が追加経済対策への期待からリスクオンの流れとなり、31.10方向へ再び下落し、週末14日にかけて31.00方向へ向けて下落が続くも、31.00付近で底堅い推移となった。14日には週末に予定されている米中間の貿易協議の検証や週明けのタイ第2Q・GDPへの警戒感が意識される中で、ポジション調整から小幅に上昇。週末には現政権に対する大規模なデモが14年クーデター以来最大の規模で行われ、政治リスクが意識された。17日は朝方発表されたタイ第2QGDPは、前年同期比-12.2%とアジア通貨危機以降、22年ぶりの落ち込みを記録。過去最悪値を辛くも回避したが、国家経済社会開発委員会は通年のタイGDP見通しを更に下方修正したこともあって、パーツ売り優勢の展開に31.20付近へ上昇。19日にタイでの緊急事態宣言が9月末まで延期されると報道されると、前週末のデモや人権派弁護士逮捕報道もあり、政治的リスクが意識されたか、パーツ安の流れが加速し31.30付近まで上昇。以降は政治的なリスクが意識されてか、上昇が続き週末21日にかけて一時31.60付近まで上げ幅を拡大させた。21日の海外時間で、ユーロ圏の経済指標が低調な結果になったことや、米経済指標が予想比良好な結果であったことなどからドル買い戻しの動きが広がり、31.50台半ばで上値の重い展開が続いた。週が変わって24日は、31.55近辺でオープン。先週末からの上昇の流れを引継ぎ、朝方には8月高値を更新し、31.65近辺まで上昇する場面もみられたが、その後は達成感から大きく売り込まれる展開に下落。以降は月末にかけて断続的に下落を続け、31.10割れの水準まで下落した。

■ 今月の見通し

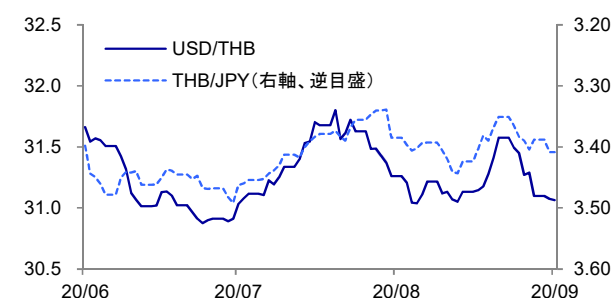
今月のドルパーツは、底堅い推移を予想する。先月は結局上へ行って来いの展開となった。タイ経済が東南アジア通貨危機以来となる最大の落ち込み幅となったことが明らかになり、それに政治的なリスクも加わったことがパーツ安となった要因であると考え、周辺諸国対比で良好なCOVID-19の状況や、比較的マイナス幅が低かった第2QGDPとを考えると、やはり周辺諸国対比で、パーツは買いやすい通貨なのかと痛感される。6月、8月の月初と2度下値トライをしてもそれ以上割込んでいけない31.00の壁は相応に高いものと考えている。これを割込むためには、今以上の材料が必要となるが、パーツ高方向への材料はこれといって見つからないものと考えている。この2か月でドルが大きく売り込まれていることが、このパーツ高の要因だとすれば、引き続きこの水準はキープされるのではないかと予想する。一方で、更に1か月延長となった非常事態宣言を巡り、国内の情勢は月を追うごとにひどくなっているようにも思う。与党内での政治的な混乱から、香港のデモ等を横目に見た学生の運動が活発化し、タイ国内でもその民主化を求める声が強くなって来ているように思われる。9月末に延長された非常事態宣言がどのように取扱われるかもターニングポイントとなりそうか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

「当地に赴任なさる方におススメする本」
バンコックにこれから初めて赴任される方にとって、それが初海外赴任であったなら、新認知にわくわくしたり、一方でどんどこ不安に思うこともあるかと思う。かくいう私もその一人でした。ですが、正直何も不安に思うことはなく、日本人が多く住んでいる地域であるスクンビット地区であれば、ここは日本かと錯覚するほど、多くの日本人に出会います。また日本語がそこかしこにありますので、ほぼ困ることはありません。ですので、バンコックに赴任されるに当たって、生活面で何か購入されるのであれば、定番ですが「地球の歩き方」でよいのではないかと思います。ですが、バンコックで生活されるのであれば、いろいろなお店においてあるフリーペーパーを集めてくることで、生活に必要な情報の大半が集まります。後はインスタやロコミでさらに役立つ情報が日本語で集まりますので、全く心配はいらないのではないかと思います。
一方で、タイの文化や考え方を日本に居るうちに学ぼうと思ってもなかなか本が見つからなかったのですが、私は「物語 タイの歴史 微笑の国の真実」という本を購入して読んでみました。本から得られた知識は、大変役に立ちましたが、日々いろいろな業務に追われていると、そういった知識はややもすると忘れてしまったなど痛感します。タイの文化や、その人となりを知るには、実践が一番だと思います。

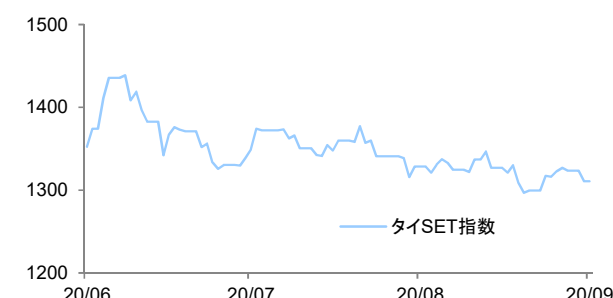
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	タイ中銀金融政策委員会	8月	0.50%	0.50%	0.50%
8/6	CPI(前年比)	7月	-1.49%	-0.98%	-1.57%
8/6	CPIコア(前年比)	7月	0.00%	0.39%	-0.05%
8/7	消費者信頼感指数	7月	-	50.1	49.2
8/17	タイGDP	2Q	-13.00%	-12.20%	-1.80%
8/20	自動車販売台数	7月	-	59,335	58,013
8/24	輸出(通関ベース/前年比)	7月	-18.75%	-11.37%	-23.20%
8/24	輸入(通関ベース/前年比)	7月	-21.60%	-26.38%	-18.10%
8/24	貿易収支(通関ベース)	7月	\$1,124M	\$3,343M	\$1,610M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.1200	～	4.2200
	MYR/JPY	25.00	～	25.65
	JPY/MYR	3.9000	～	4.0000

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

8月のUSD/MYRは4.24レベルでオープン後、USDの減価基調と堅調な原油価格に連れて下落。月末に掛けて4.17台を付けている。

米国のコロナ対策と多額の財政支出がUSDの減価を促す中で、月初には金価格も史上初めて\$2,000を突破。ペイルート爆発事件がテロの懸念を想起させる中、北海ブレントも一時\$46/bbl超え迄上昇すると、USD/MYRも6日に活動制限令前の3/10以来となる4.2割れ。6月鉱工業生産指数も事前予想を遥かに上回る内容で、4.18台迄下げ幅を拡大。

中旬10日には、7日の強めの米雇用統計や米国による中国大手IT2社との取引禁止や中国高官向け制裁措置、それに続く中国側の報復がリスク地合を悪化させたことから4.20レベルに若干反発。その後、過去最悪の数字が予想される第二四半期GDP成長率発表を14日控えて様子見姿勢が強まった。GDP成長率は予想比大幅弱めで、アジア通貨危機時の98年第四四半期(▲11.2%)を凌ぎ、史上最大の下げ幅を記録。前期(+0.7%)比でも急落となったが、弱い数字への警戒感がある程度織込まれていたこともあり、USD/MYRへの反応は限定的で戻りは4.20台でキャップ。またマレーシア中銀は「景気の底は第二四半期」で「経済活動再開から下半期の回復と21年の反発を見通す」とコメントを發しつつ、20年度GDP成長率予想を▲2.0%～+0.5%から▲5.5%～▲3.5%へと下方修正している。

GDP発表後もUSDインデックスの下落基調が継続する中で、米国の技術産業関連での対中圧力の高まりや米中フェーズ1通商合意のレビューに関する警戒感がリスク地合を悪化。7月CPIは概ね予想通りで5ヶ月連続のマイナス。主因は依然燃料価格の下落ながら、下げ幅(▲10.3%)は前月比緩和。USD/MYRは19日に5か月振り安値となる4.17レベル迄再度反落した。

月末週にはMYR買い実需も回復し、25日に4.16台迄安値を更新。7月輸出が予想外の前年比プラスで経常黒字が2か月連続過去最高となる中で、MYRも堅調さを維持。4.17レベルで月を越している。

■ 今月の見通し

9月のUSD/MYRは4.12～4.22レンジでの推移を予想。主要国でのコロナ第二波が継続する中で、米大統領選挙に向けたドル安基調が鮮明化。一方原油価格は安定推移し、国内では経済再開以降回復基調にある輸出の決済が増加することで、MYRは堅調な推移が見込まれる。

4月に22年振りの単月経常赤字を記録した貿易統計は、6月と7月に2か月連続で過去最大の経常黒字を記録。活動制限令でストップしていたバックオーダーが動き始めた反動とも見られるが、6月鉱工業生産指数等回復の兆候は見られ始めている。輸出相手国として中国への依存度が高まっているが、外需の回復が先行している情勢だ。

過去最悪だった第二四半期GDPも、月別には4月が前年比約3割、5月が同約2割の落込みとなったが、6月は3%程度迄落込み幅が縮小。左記の通り中銀は発表同日に20年度GDP成長率見通しを下方修正も、下期の回復と21年度のV字回復予想(+5.5%～8.0%)を發している。やはり知財に焦点が戻った感もある米中対立や米大統領選を巡ってドル安基調が続く中、一般的な当地輸出企業の決済サイトが3か月以内であることから実需のMYR買いの回復も予想される。

7月CPIは5か月連続マイナス着地。コア指数も+1.1%と前月比で若干低下。中銀が重視する成長率、インフレのいずれの観点でも足元のオーバーナイト政策金利1.75%には依然追加利下げの欄が十分。7月末に政府は個人や中小企業を対象としたモラトリアム令の年末迄の延長をアナウンスしたが、当初と異なり金融機関への個別申請を条件に加えた点は、金融機関の負担への配慮とも映る。

翻って、海外投資家の馬国債投資ネットフローも足元3か月は大幅流入に転じており、中銀の段階的利下げへの期待が反映。個人の住宅ローン負担軽減の観点でも次回9/10政策会合で▲0.25%の追加利下げが決定される可能性は高いと考えられるが、国内債券市場利回りに加えて短期指標金利KLIBORの低下も追加利下げを織込みに行く動きと見え、需給面でもMYRを支援しそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』

3月以降閉ざされていた当地のイミグレーションも先月から漸く再開し始めているが、今のタイミングで当地に赴任渡航なさるお客様も多数いらっしゃるかと察します。そんな皆様に以下3冊の本をご紹介します。

1. 高校生からわかるイスラム世界 (集英社、池上彰著)

マレーシア人の6割はイスラム教徒のマレー人。当地で勤務経験のある先輩が、筆者の赴任時に「イスラム教の国で働く機会なんて、そうそう無いぞ」と言って贈ってくれた本。

2. 立ち上がれ日本人 (新潮社、マハティール・モハマド著)

前首相が2003年に長期政権を辞した時期に著わした本。前首相が知日派と云われる所以が判り、また現在の当地の政局の背景を知るのに有用と感じている。

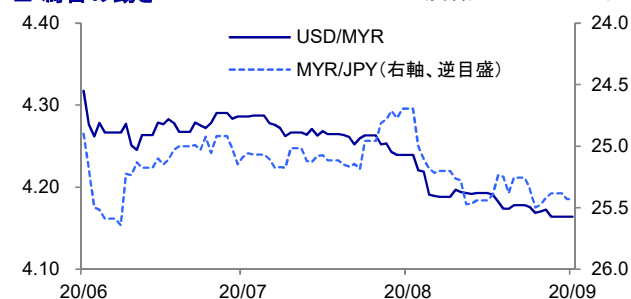
3. マレーシアハンドブック2020 (JACTIM編)

JACTIMというのはマレーシア日本人商工会議所の略称で、当地の地勢・歴史から行政・社会・産業・経済・文化迄網羅した案内書を凡そ3年に一度のペースで刊行。商工会議所参加企業の他、日本大使館、JETRO、JICAの方々が分担して執筆・編集に当たっている。今年が丁度刊行年に当たり、足元の当地のビジネス情報を得るのにオススメしたい。

皆様、どうぞお気をつけてマレーシアにお越しください。

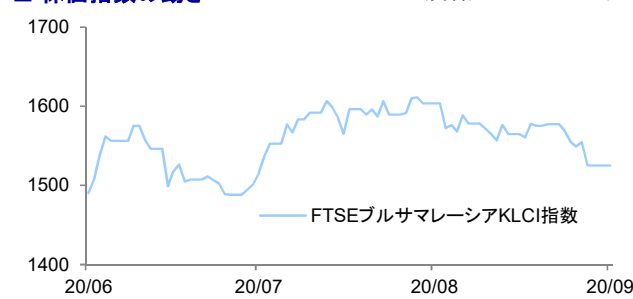
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/28	Trade Balance (MYR)	Jun	11.6B	20.9B	10.4B
8/7	Industrial Output y/y	Jun	-10.4%	-0.4%	-22.1%
8/7	Foreign Reserves	30-Jul	-	104.2B	104.0B
8/14	GDP	Q2	-10.9%	-17.1%	0.7%
8/14	C/A Balance MYR	Q2	4.5B	7.6B	9.5B
8/21	CPI	Jul	-1.3%	-1.3%	-1.9%
8/21	Foreign Reserves	14-Aug	-	104.3B	104.2B
8/28	Trade Balance (MYR)	Jul	16.3B	25.2B	20.9B
8/28	Exports	Jul	-1.4%	3.1%	8.8%
8/28	Imports	Jul	-4.5%	-8.7%	-5.6%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14400 ~ 15000
 IDR/JPY 0.71 ~ 0.75
 JPY/IDR 133.33 ~ 140.85

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

8月のドルルピアは、方向感無く推移した。ドルルピアは月初3日、14600台後半でスタート。この日発表されたインドネシア7月CPIは6月に引き続き2%を割り込み1.54%となり、中銀のターゲットレンジを大きく割り込んだが相場への影響は限定的となった。5日にかけてドル安地合いの中、ルピアはしっかりと推移した。同日発表のあったインドネシア第2四半期GDPは、マイナス5.32%と冴えない内容となるも、こちらも影響は限定的に留まり、翌6日には14500を一時割り込み14400台後半までルピア高が進み月内のルピア高値を出現した。翌7日には、米中の緊張の高まりを受けてアジア通貨が全般的に安く推移する中、ルピアも14600台後半へ押し戻された。また、インドネシア中銀が政府との新型コロナウイルス対策費の共同負担で合意後、初めて82兆ルピアの国債を直接引き受けた中で、ルピア安が進んだ。翌週10日以降もルピア安地合いが継続。国外株主への配当金支払いフロー出ている模様で、ルピア売り圧力が強まり、ルピアは軟調に推移。週末14日には14900台へのせた。また、この日、2021年の予算案をインドネシア政府が発表した際に、財政赤字目標はGDP比5.5%とし、21年の財政赤字のファイナンスに中央銀行も協力するとの内容が含まれたこともあり、財政ファイナンスへの懸念が強まった。月後半の18日、発表されたインドネシア7月貿易収支は引き続き輸入の落ち込みが激しくなり、凡そ32億ドルの大幅な黒字を記録するも、ルピアは安値圏での取引が続いた。翌19日のインドネシア中銀政策決定会合では、政策金利である7日物リバースレポレートは現状維持が決定された。中銀は現在の政策は低インフレが続くことが予想される環境下、政策は整合的であるとした。また、来年の国債買い入れについても協議していくとした。連休明けとなった24日、中銀は天然資源の大手輸出企業に対し、外貨収入の一部をルピアに両替することを義務付ける新たな規制を導入する方針を発表。これを受けてオフショアNDF市場でルピア高が進む中、26日には14600割れまでルピアは値を回復した。その後は月末のドル買い需要により、14600台から700台を中心とした推移が続いた。(28日終値時点)

■ 今月の見通し

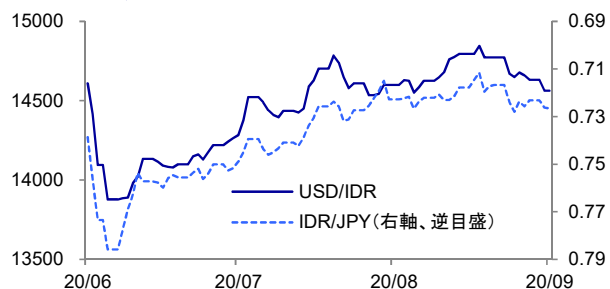
9月のドルルピアは引き続き方向感無く推移することを予想する。インドネシアにおけるコロナウイルス感染拡大状況は引き続き厳しい状況が続いており、国内経済へ暗い影を落とす。しかし、繰り返し本欄で述べている様に、各国の中央銀行が市場に潤沢な資金を供給し続けており、相次ぐ利下げも相まって、株式をはじめとするリスク資産の価格が下支えされており、インドネシア国債やインドネシア株式市場も例外ではなく、ルピアの安定に寄与している。先月、米FRBパウエル議長は期間平均で2%のインフレ率を目指すと表明し、インフレがオーバーシュートする期間を容認する可能性を示唆する等、金融緩和姿勢は更に強まっている。この動きはルピアをサポートしよう。インドネシアの輸入は引き続き大きく減少しており、貿易収支は7月も大きな黒字を記録した。これは実需のルピア売りは減少に繋がり、ルピア安圧力の低減につながっていると考えられる。また、既述の通り、ルピア安対策の一環として、天然資源の大手輸出企業に対し、外貨収入の一部をルピアに両替することを義務付けといった規制の話も出てきている。インドネシア中銀は弱いインフレと国内経済に立ち向かう為、更なる利下げ余地を求めて、ルピアの安定に積極的な関与姿勢を強めたいのだろう。とは言え、現状の水準で更なる利下げに踏み切るのは難しいとみる。一方でルピア安に繋がる懸念材料も燦々。7月のインドネシア中銀と財務省の国債買入に関する散発的にインドネシア国債の直接買入が話題に挙がっており、こちらはルピアにとってネガティブな要素となる。この点もあつてか、8月に入ってからインドネシア国債への海外投資家による買入は一旦手が止まっている状況。引き続き、新たな国債の直接買入に関する報道には注意が必要だ。以上から上下に動く材料がある状況であり、今月のルピアも方向感が出難い動きとなることを予想したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

大変恐縮なのですが、諸般の事情により、暫くの間休載とさせていただきます。

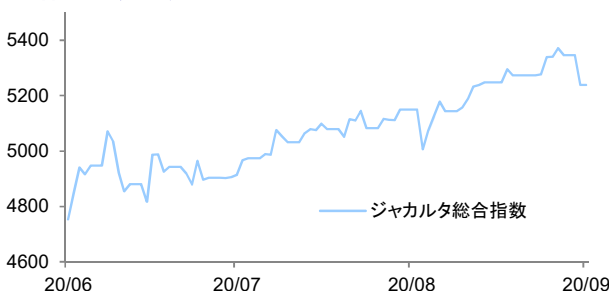
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	CPI(前年同月比)	7月	1.71%	1.54%	1.96%
8/5	GDP(YoY)	2Q	-4.72%	-5.32%	2.97%
8/7	外貨準備高	7月	-	135.1	131.7
8/18	貿易収支(USD M)	7月	889	3263	1249
8/18	輸出(前年比)	7月	-14.30%	-9.90%	2.09%
8/19	BI 7daysリバースレポ金利	7月	4.00%	4.00%	4.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 47.80 ~ 49.15
PHP/JPY 2.15 ~ 2.21

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

月初のドルペソ為替相場は前週終値と同水準の1米ドル＝49.15ペソで取引開始。マニラ首都圏の再ロックダウン、5月の海外在留フィリピン人労働者 (OFW) 送金が前年同月比で2001年1月以来の最大の減少幅となる19.3%減を記録したことなどペソ売り材料はあったが、1米ドル＝49.185ペソまででこれが月のドル高値に。

5日に発表された比7月の消費者物価は前年同月比+2.7%で6か月ぶりの高水準。前月の2.5%、市場予想(2.5%)から上振れ。また、比6月貿易赤字は13.3億ドルとなり、赤字幅が市場予想(16億ドルの赤字)と比べて縮小、前月分は18.7億ドルの赤字から13.2億ドルの赤字に修正された。ペソは強含みとなったが、6日に発表された比第2四半期GDPが前年同期比16.5%減となり、1981年以降で最大のマイナス幅で2四半期連続のマイナス成長により29年ぶりの景気後退となったことから1米ドル＝49ペソ割は持ち越しに。

米7月雇用統計を受けて週明け10日は1米ドル＝49.05ペソで出合ったが、米株式市場の底固さを受けてアジア通貨が対ドルで強含む流れで11日に1米ドル＝49ペソを割り込んだ。

月央もペソ高が継続。19日から再びマニラ首都圏の外出規制が緩和されたこと、6月のOFW送金が24.7億ドルとなり、前年同月比で7.7%増と3ヶ月ぶりにプラスになったことが好感された。

米FOMC議事録の発表後、ドルペソ為替相場は底固くなる場面もあったが、ジョクノフィリピン中銀総裁は更なる財政出動が必要としながら、銀行の預金準備率については現状の水準が適正、ペソの流動性は過剰とコメントし、また為替の水準については市場に任せるとのスタンスをとったことからペソは11週続伸、16年11月4日以来のペソ高水準である1米ドル＝48.485ペソで8月のオンショア取引を終えた。

■ 今月の見通し

8月に一時6000ポイントを回復したフィリピン株式指数は再び6000ポイントを下回り、月末の終値は5884.18ポイントと冴えない。外国人投資家の売買動向も直近二週間は再び売り越しに転じている。

フィリピン中銀が発表した7月の海外証券投資は4.5億ドルの流出で5か月連続の流出を記録した。

米国の長期金利はパウエル議長講演がある程度想定内であったことから、行き過ぎたドルの金融緩和期待を修正する動きに米10年債利回りは上昇して2か月半ぶりの0.76%台で取引されている。

これらの材料と比7月貿易収支、同海外在留フィリピン人労働者 (OFW) 送金の結果によってはペソが対ドルで軟調になる場面、ペソ高を緩和させる可能性はありそうだが、米国の株式市場が堅調さを維持する限り、大きな流れとしてはペソ高地合いが続くとみる。

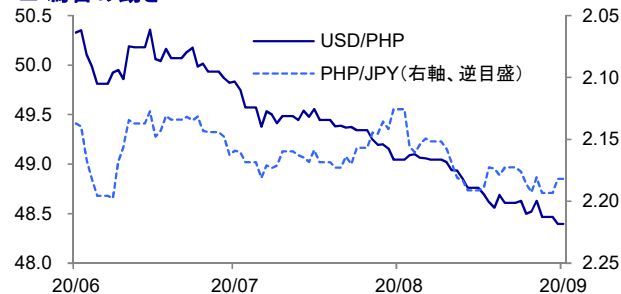
8月20日にフィリピン中銀は市場予想通り政策金利の据え置いた。今年に入ってからの下り効果を確認するステージになり、年後半の一段の金融政策緩和余地を残すことに。金利低下一服もペソをサポートしそうだ。

ドルインデックスはこの二週間は方向感を探る展開となっていたが、パウエルFRB議長講演後は再びドル安地合いとなりそう。アジア通貨インデックスも年初の水準まで戻しており、コロナ禍以前の水準を完全に上回り6週続伸している。

左記の通り、ジョクノ総裁はドルペソ為替相場の水準については市場に任せると発言しているが、(水準を押し上げる介入は想定しづらいが) スムージングオペレーションとして一定の水準を防衛することは今後大いにあるのでは。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 72.00 ~ 76.00
INR/JPY 1.38 ~ 1.48

■ 先月の為替相場

【8月の米ドル/インドルピーは5か月ぶり水準まで下落】

ドル/ルピーは74.91で8月取引をスタート。月初から75台を上回る推移となり、4日には当月高値となる75.18を示現。一方、18か月ぶりとなった米製造業指標や同国の一日当たり感染者の7日平均が5万人を割り込むなど、好材料が並ぶとドル/ルピーは74台を回復、同レベルでのみみ合いとなる。6日にはインド金融政策会合が開催され、政策金利の据え置きを決定。事前予想では「利下げ」と「据え置き」に意見が割れている地合いの中での発表であったが、為替市場への影響は限定的となり、横ばい継続。

2週目にはトランプ大統領が中国の大手ソーシャルメディア2社への取引制限に署名したとのヘッドラインに再び75台をつける場面も大きな動きにはならず。インド地場銀行が相次いで既存株主に対する割当や新株発行を発表すると海外からの投資資金流入フロー(=ドル売り/ルピー買い)が意識され75台からは滑り落ちる展開。続いて発表された印消費者物価指数は事前予想を上回る上昇率に中銀の利下げ期待が後退し、ルピーは買われる展開。節目とされた74.75を一時的に割り込むも、間髪入れず中銀からの為替介入が入り、ルピー高方向はけん制される展開。

3週目も前半は74.80upperでのみみ合いが続いたが、通貨先物でドルのショートが9年ぶり水準まで積みあがるなど、ドル安主導でルピー高圧力がかかり、19日の寄り付きで74.69まで下落するもここでも中銀から為替介入が入りドルショートのスクライズ。翌20日には予想よりもハト派ではなかった米FOMC議事録にドル買いとなり、ドル/ルピーは75台を回復するも高値圏ではドル売り圧力も相応にあり、同レベルでの滞空時間は短く、74台へ押される展開。

動いたのは4週目で、5か月ぶり高値となるインド株式を横目に外銀勢がルピー買いを仕掛ける中、節目とされていた74.75・74.50をブレイク。長きにわたり同レベルを掬ってきた印中銀の為替介入が出ないと見るや74.28まで一気に下落。翌日、翌々日とRBIフィクシングが計られる午前中は介入を背景としているであろう国営銀行のドル買いが入り浮上する動きが見られたが、本格的な動きとはならず。27日の午後から下方向に崩れる。節目とされていた74.20から74.00を割り込むまで僅か2分弱、ドル買い持ち勢のストップロス巻き込みながら73.81を示現。翌28日も下掘りの動きは止まらず、当月安値となる73.28まで下落。73.40で28日14時を迎えた。株式と同じくドル/ルピーもインドがロックダウンを開始する前の水準を回復した。

■ 今月の見通し

【9月の米ドル/インドルピーは安値圏をもみ合う展開を予想】

先月の本欄に書いた予想に沿うようにドル安主導でルピー高が進展している地合い。インド国内要因では政策金利の据え置きがあったが、既述のとおり直後の為替への影響は限定的。一方、調達に走る地場企業や、株高に支えられ海外投資家の資金流入は健在。ルピー買いに抗う主体として印当局による為替介入を市場参加者は意識し続けてきたが、8月については介入が入るものの、ドル/ルピーは74台の50・25・00と節目をブレイクし続け、予想を裏切ったかたちとなっている。

介入については当局の判断次第であるため、今後の動きを予想することは難しいが、確からしいことが二点。①インド中銀は為替介入の判断においてドル/ルピーの特定の水準を基準としておいておらず、急激な変動を回避することは目的としている。②中銀総裁はスピーチにおいてしばしば実質実効為替レートを参照するが、現状ルピーの実効レートは長期的に見ると安いとも言えないニュートラルな水準である。ということだ。

ひるがえって、①を勘案するとすぐに72台に突入するようなルピー高になることはないまでも、②を鑑みるにドル/ルピーが75台でないといふ、といったイントはインド中銀にはないはずである。これを踏まえて、既述の海外からの資金流入と原油価格とインドの輸入量も気にしなければいけない材料である。

従前と同様にドルの動向に注視しながらも、ドル/ルピーは現状の安値水準での推移をベースライン予想としたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に赴任なさる方におススメする本』

次の2冊を紹介したい。

1.「お金儲けは『インド式』に学べ！」 野瀬大樹著 2019年

駐ムンバイの同僚からの推薦。「インド国内線ではなぜか自分の席に平気で座っているインド人に遭遇する」など、インドあるあるの事前知識が得られる。エッセイ風で軽く読めるのも良い。

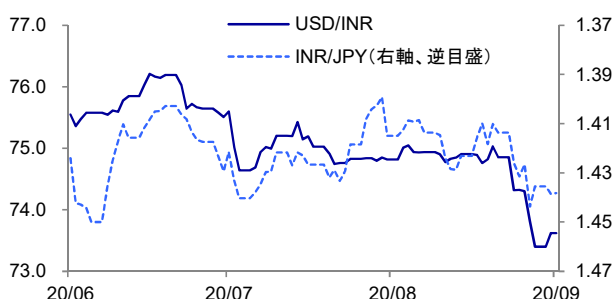
2.「河童が覗いたインド」 妹尾河童著 1991年

インドに興味がなくとも、行ってみたいという気分にさせる本。舞台美術家の著者の緻密な再現イラストは楽しく、ダメ元で何でも言ってみたりトラブルを面白がったりする姿勢はビジネスのヒントにもなる。チャイが数パイサで飲めた時代の話だが、今も多くの人を引き付ける。

(インド営業部バンガロール 木原志乃)

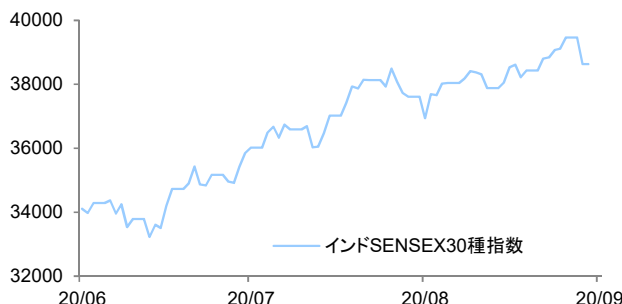
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	製造業PMI	7月	-	46.0	47.2
8/6	レポレート	-	3.75%	4.00%	4.00%
8/11	鉱工業生産	6月	-21.0%	-16.6%	-33.9%
8/13	CPI	7月	6.26%	6.93%	6.23%
8/14	貿易収支	7月	\$1.9bio赤字	\$4.8bio赤字	\$0.8bio黒字

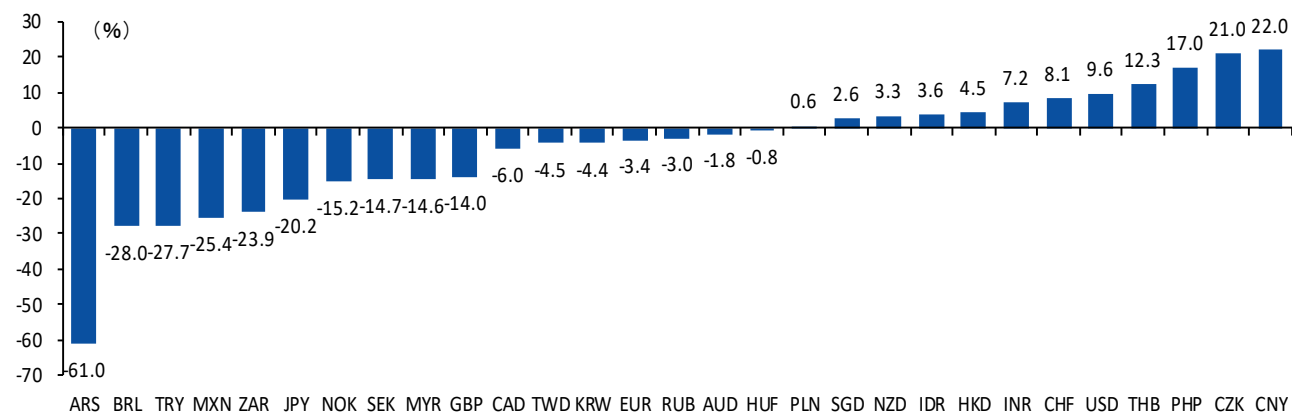
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2019年末	2020年8月末	騰落率	株式市場	2019年末	2020年8月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	28538.44	28430.05	-0.4%	-
日本	USD/JPY	108.61	105.91	-2.5%	日経平均株価	23656.62	23139.76	-2.2%	0.3%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1213	1.1936	6.4%	ドイツDAX指数	13249.01	12945.38	-2.3%	-2.3%
英国	GBP/USD	1.3257	1.337	0.9%	ロンドンFTSE100指数	7542.44	5963.57	-20.9%	-21.6%
豪州	AUD/USD	0.7021	0.7376	5.1%	S&P/ASX200指数	6684.075	6060.462	-9.3%	-13.7%
カナダ	USD/CAD	1.299	1.3047	0.4%	S&Pトロント総合指数	17063.43	16514.44	-3.2%	-3.6%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.9632	6.8485	-1.6%	上海総合	3050.124	3395.677	11.3%	13.2%
香港	USD/HKD	7.7914	7.7502	-0.5%	香港ハンセン	28189.75	25177.05	-10.7%	-10.2%
インド	USD/INR	71.38	73.62	3.1%	インドSENSEX30種	41253.74	38628.29	-6.4%	-9.2%
インドネシア	USD/IDR	13866	14563	5.0%	ジャカルタ総合	6299.539	5238.487	-16.8%	-20.8%
韓国	USD/KRW	1155.84	1187.76	2.8%	韓国総合株価	2197.67	2326.17	5.8%	3.0%
マレーシア	USD/MYR	4.091	4.164	1.8%	ブルサマレーシアKLCI	1588.76	1525.21	-4.0%	-5.7%
フィリピン	USD/PHP	50.655	48.397	-4.5%	フィリピン総合	7815.26	5884.18	-24.7%	-21.2%
シンガポール	USD/SGD	1.3459	1.3603	1.1%	シンガポールST	3222.83	2532.51	-21.4%	-22.3%
台湾	USD/TWD	29.991	29.405	-2.0%	台湾加権	11997.14	12591.45	5.0%	7.0%
タイ	USD/THB	29.705	31.075	4.6%	タイSET	1579.84	1310.66	-17.0%	-20.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2020年7月時点)



■ 実質GDP成長率

	2018Q4	2019Q1	2019Q2	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2018	2019
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	1.3	2.9	1.5	2.6	2.4	-5.0	-31.7	3.0	2.2
日本*	2.3	2.8	1.7	0.2	-7.0	-2.5	-27.8	0.3	0.7
ユーロ圏	1.2	1.4	1.3	1.4	1.0	-3.1	-15.0	1.9	1.3
英国	1.4	2.0	1.4	1.3	1.1	-1.7	-21.7	1.3	1.5
豪州	2.2	1.7	1.6	1.8	2.2	1.4		2.8	1.8
カナダ*	1.0	1.2	3.2	1.1	0.6	-8.2	-38.7	2.0	1.7
エマージングアジア									
中国	6.5	6.4	6.2	6.0	6.0	-6.8	3.2	6.7	6.1
香港	1.1	0.7	0.4	-2.8	-3.0	-9.1	-9.0	2.8	-1.2
インド	5.6	5.7	5.2	4.4	4.1	3.1	-23.9	8.0	8.3
インドネシア	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	3.0	-5.3	5.2	5.0
韓国	3.1	1.8	2.1	2.0	2.3	1.4	-2.9	2.9	2.0
マレーシア	4.8	4.5	4.8	4.4	3.6	0.7	-17.1	4.7	4.3
フィリピン	6.4	5.7	5.4	6.3	6.7	-0.7	-16.5	6.3	6.0
シンガポール	1.1	1.0	0.2	0.7	1.0	-0.3	-13.2	3.5	0.7
台湾	2.0	1.8	2.6	3.0	3.3	2.2	-0.6	2.8	2.7
タイ	3.8	2.9	2.4	2.6	1.5	-2.0	-12.2	4.2	2.4

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	19/12	20/01	20/02	20/03	20/04	20/05	20/06	20/07	2018	2019
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.5	3.6	3.5	4.4	14.7	13.3	11.1	10.2	3.9	3.7
日本	2.2	2.4	2.4	2.5	2.6	2.9	2.8		2.4	2.4
ユーロ圏	7.4	7.4	7.2	7.2	7.5	7.7	7.8		8.2	7.6
英国	3.8	3.9	4.0	3.9	3.9	3.9	3.9		4.1	3.8
豪州	5.1	5.3	5.1	5.2	6.4	7.1	7.4	7.5	5.3	5.2
カナダ	5.6	5.5	5.6	7.8	13.0	13.7	12.3	10.9	5.8	5.7
エマーGINGアジア										
中国	3.6			3.7					3.8	3.6
香港	3.3	3.4	3.7	4.2	5.2	5.9	6.2	6.1	2.8	2.9
インドネシア			5.0						5.2	5.2
韓国	3.7	4.0	3.3	3.8	3.8	4.5	4.3	4.2	3.8	3.8
マレーシア	3.3	3.2	3.3	3.9	5.0	5.3	4.9		3.3	3.3
フィリピン		5.3			17.7				5.3	5.1
シンガポール	2.3			2.4			2.9		2.1	2.3
台湾	3.7	3.7	3.7	3.8	4.1	4.2	4.0	3.9	3.7	3.7
タイ	1.0	1.1	1.1	1.0					1.1	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	19/11	19/12	20/01	20/02	20/03	20/04	20/05	20/06	20/07	2018	2019
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	2.1	2.3	2.5	2.3	1.5	0.3	0.1	0.6	1.0	2.4	1.8
日本	0.5	0.8	0.7	0.4	0.4	0.1	0.1	0.1	0.3	1.0	0.5
ユーロ圏	1.0	1.3	1.4	1.2	0.7	0.3	0.1	0.3	0.4	1.8	1.2
英国	1.5	1.3	1.8	1.7	1.5	0.8	0.5	0.6	1.0	2.5	1.8
豪州		1.8			2.8			-0.3		1.9	1.6
カナダ	2.2	2.2	2.4	2.2	0.9	-0.2	-0.4	0.7	0.1	2.3	1.9
エマーGINGアジア											
中国	4.5	4.5	5.4	5.2	4.3	3.3	2.4	2.5	2.7	2.1	2.9
香港	3.0	2.9	1.4	2.2	2.3	1.9	1.5	0.7	-2.3	2.4	2.9
インド	5.5	7.4	7.6	6.6	5.8	7.2	6.3	6.2	6.9	4.0	3.7
インドネシア	2.7	2.6	2.7	3.0	3.0	2.7	2.2	2.0	1.5	3.2	2.8
韓国	0.2	0.7	1.5	1.1	1.0	0.1	-0.3	0.0	0.3	1.5	0.4
マレーシア	0.9	1.0	1.6	1.3	-0.2	-2.9	-2.9	-1.9	-1.3	1.0	0.7
フィリピン	1.3	2.5	2.9	2.6	2.5	2.2	2.1	2.5	2.7	5.2	2.5
シンガポール	0.6	0.8	0.8	0.3	0.0	-0.7	-0.8	-0.5	-0.4	0.4	0.6
台湾	0.6	1.1	1.9	-0.2	0.0	-1.0	-1.2	-0.8	-0.5	1.4	0.6
タイ	0.2	0.9	1.1	0.7	-0.5	-3.0	-3.4	-1.6	-1.0	1.1	0.7

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2018Q4	2019Q1	2019Q2	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2018	2019
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.3	-2.4	-2.4	-2.2	-2.1		-2.2	-2.2
日本	3.5	3.6	3.5	3.4	3.6	3.6	3.1	3.5	
ユーロ圏	3.1	3.0	2.5	2.6	2.7	2.4	2.3	3.1	2.7
英国	-3.9	-4.7	-4.7	-4.8	-4.0	-3.3		-3.9	
豪州	-2.0	-1.6	-0.7	0.1	0.5	1.1		-2.0	
カナダ	-2.5	-2.6	-2.3	-2.4	-2.0	-1.9	-1.9	-2.5	-2.0
エマージングアジア									
中国	0.2	0.7	0.9	1.1	1.0	0.6	1.2	0.2	
香港	3.7	4.3	5.0	5.9	6.1	4.9		4.3	
インド	-2.4	-2.1	-2.1	-1.6	-1.0	-0.8		-2.4	-1.0
インドネシア	-3.1	-3.0	-3.0	-2.9	-2.7	-2.5	-2.1	-2.9	-2.7
韓国	4.6	4.7	4.3	3.8	3.7	3.8		4.5	
マレーシア	2.3	2.4	3.1	3.6	3.3	2.8	2.5	2.3	
フィリピン	-2.3	-2.6	-1.5	-1.0	-0.1	0.3		-2.3	
シンガポール	17.2	16.9	17.3	17.0	17.0	16.7	16.1	17.2	17.0
台湾	11.6	11.0	10.9	11.3	10.6	10.6	11.2	11.6	10.6
タイ	5.6	5.2	5.4	6.4	7.0	6.4		5.6	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2020/7/30	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2020/7/15	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2020/7/16	現状維持
英国	バンク・レート	0.10	緩和: 2020/3/11	0.75	2020/3/19	-15bp	2020/8/6	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	0.25	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/3/19	-25bp	2020/8/4	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2020/7/15	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.85	緩和: 2012/6/8	6.31	2020/4/20	-20bp	2020/8/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2020/8/6	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.00	緩和: 2019/7/18	6.00	2020/7/16	-25bp	2020/8/19	現状維持
韓国	7日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/7/18	1.75	2020/5/28	-25bp	2020/8/27	現状維持
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2020/7/7	-25bp
フィリピン	翌日物金利	2.25	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/6/25	-50bp	2020/8/20	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2020/8/5	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/5/12	-50bp	2020/5/12	-50bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利を日レートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行